志木市の文化財　第80集

西原大塚遺跡 第231地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２１

埼玉県志木市教育委員会

は　じ　め　に

志木市教育委員会
教育長　柚木　博

ここに刊行する『西原大塚遺跡第231地点埋蔵文化財発掘調査報告書』は、教育委員会が令和２年度に受託事業として実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

現在、市内には、15カ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されています。これらの埋蔵文化財は祖先が残してきた貴重な文化遺産であり、私たちはこれを大切に保護し後世に伝えていく使命があると言えます。

また、西原大塚遺跡については、これまでの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時期にわたる複合遺跡であることが判明しています。

今回報告する第231地点では、縄文時代の土坑３基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡４軒・溝跡１本、中世の柵列状遺構２条などが発見されました。

このように、今回の調査においても本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別の御理解と御協力を頂いた事業主体者、深い御理解と御協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

例　　言

1．本書は、令和２年（2020）度に発掘調査を実施した、埼玉県志木市に所在する遺跡である西原大塚遺跡（県№09－007）の第231地点の発掘調査報告書である。

2．発掘作業及び整理作業は、志木市教育委員会の受託事業として、土木工事主体者の個人から委託を受け実施した。

3．本書の作成において、編集は大久保聡が行い、執筆は下記以外を大久保が行った。
　尾形　則敏　第１章、第３章第３節

4．遺物の実測は、星野恵美子・松浦恵子・増田千春が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木　修・池野谷有紀が行った。写真撮影は青木が行った。

5．本書に掲載した石器については、有限会社アルケーリサーチ（取締役社長　藤波啓容）に実測を委託した。

6．自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボ（代表取締役　中村賢太郎）に委託した。

7．発掘作業における表土剥ぎ作業については、株式会社大塚屋商店（代表取締役　綱島正人）に委託した。

8．本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターで一括して保管している。

9．調査組織（令和２年度）

教育長	柚木　博
教育政策部長	北村竜一
教育政策部次長	大熊克之
生涯学習課長	山本　勲
生涯学習課副課長	中原敦也
生涯学習課主幹	浅見千穂
生涯学習課主査	武井香代子
〃	尾形則敏
〃	徳留彰紀
生涯学習課主任	松永真知子
〃	大久保　聡
生涯学習課主事補	鈴木楓月
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）
〃	深瀬　克（委員）
〃	上野守嘉（委員）
〃	新田泰男（委員）
〃	金子博一（委員）

10．発掘作業及び整理作業参加者

○発掘作業

調　査　担　当　者　　大久保　聡・尾形則敏
調　　査　　員　　深井恵子
調　査　補　助　員　　星野恵美子
作　　業　　員　　池野谷有紀・片山　望・小林詠美子・二階堂美知子・増田千春・
松浦恵子・村田浩美
重機オペレータ　　小林貴司（株式会社大塚屋商店）

○整理作業
調　　査　　員　　深井恵子・青木　修
調　査　補　助　員　　星野恵美子
作　　業　　員　　池野谷有紀・片山　望・小林詠美子・二階堂美知子・増田千春・
松浦恵子・村田浩美・山口優子

11．各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

江原　順・加藤秀之・川畑隼人・隈本健介・斉藤　純・齋藤欣延・斯波　治・鈴木一郎・照林敏郎・中岡貴裕・野沢　均・早坂廣人・堀　善之・前田秀則・柳井章宏・山本　龍・和田晋治・渡辺邦仁

12．本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
令和２年５月11日付け　教文資第４－145号

○埋蔵物の文化財認定について（通知）
令和２年９月８日付け　教文資第７－65号

凡　　例

1．本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第１図　　1：10,000「志木市全図」株式会社パスコ調製

第２図　　1：2,500　ゼンリン電子住宅地図　デジタウン「埼玉県志木市」平成27年４月発行
株式会社ゼンリン

2．本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系に則している。

3．挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

4．遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。

5．ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位は㎝である。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

6．遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

7．挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。

8．土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は［　］、推定値は（　）を付した。

高：器高　　口：口径　　底：底径　　厚：器厚

9．遺構の略記号は、以下のとおりである。

Ｙ＝弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡　　Ｈ＝古墳時代後期～平安時代の住居跡

Ｄ＝土坑　　Ｍ＝溝跡　　柵＝柵列状遺構　　Ｐ＝ピット

目　　次

はじめに
例　　言／凡　　例／目　　次／挿図目次／表 目 次／図版目次
第１章　遺跡の立地と環境……1
　第１節　市域の地形と遺跡……1
　第２節　遺跡の概要……7
第２章　発掘調査の概要……10
　第１節　調査に至る経緯……10
　第２節　発掘調査の経過……11
第３章　検出された遺構と遺物……14
　第1節　縄文時代の遺構・遺物……14
　第2節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物……16
　第3節　古墳時代後期～平安時代の遺構……32
　第4節　中世の遺構・遺物……33
　第5節　遺構外出土遺物……38
第４章　調査のまとめ……40
　第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の調査成果……40

［付編］自然科学分析
Ⅰ．西原大塚遺跡第231地点425号住居跡の赤砂利層の分析……45

図　　版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　市域の地形と遺跡分布（1／20,000）…… 2
第２図　西原大塚遺跡の調査地点（1／5,000）…… 8
第３図　確認調査時の遺構分布・全体計画（1／300）…… 10
第４図　遺構分布図（1／200）…… 12
第５図　土坑・907号土坑出土遺物（1／60・1／3）…… 15
第６図　25号ピット（1／60）…… 15
第７図　425号住居跡（1／60）…… 18・19
第８図　425号住居跡遺物出土状態（1／60）…… 20
第９図　425号住居跡炉跡（1／30）…… 20
第10図　425号住居跡出土遺物（1／3・1／4）…… 21
第11図　635号住居跡（1／60）…… 23
第12図　635号住居跡出土遺物（1／3）…… 23
第13図　636号住居跡（1／60）…… 24
第14図　636号住居跡出土遺物（1／4・1／3）…… 25
第15図　637号住居跡（1／60）…… 26
第16図　637号住居跡出土遺物（1／3）…… 26
第17図　44号溝跡（1／60）…… 27
第18図　44号溝跡出土遺物１（1／4・1／3）…… 29
第19図　44号溝跡出土遺物２（1／3）…… 30
第20図　28号住居跡（1／60）…… 32
第21図　５号柵列状遺構（1／60）…… 34
第22図　６号柵列状遺構（1／60）…… 35
第23図　６号柵列状遺構出土遺物（1／4）…… 37
第24図　遺構外出土遺物（2／3・1／3）…… 38
第25図　44号溝跡と周辺の遺構（1／1,000）…… 41
第26図　425号住居跡赤色砂利層サンプリング区分け（1／60）…… 45

表　目　次

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧 …… 1
第２表　西原大塚遺跡第231地点の発掘調査工程表 …… 11
第３表　425号住居跡出土土器一覧 …… 22
第４表　635号住居跡出土土器一覧 …… 24
第５表　636号住居跡出土土器一覧 …… 25
第６表　637号住居跡出土土器一覧 …… 26
第７表　44号溝跡出土土器一覧（１） …… 30
　　44号溝跡出土土器一覧（２） …… 31
第８表　５・６号柵列状遺構内ピット一覧 …… 37
第９表　６号柵列状遺構出土陶器一覧 …… 37
第10表　遺構外出土石器一覧 …… 39
第11表　遺構外出土土器一覧 …… 39
第12表　遺構外出土陶磁器・土器一覧 …… 39
第13表　分析試料とその特徴 …… 45
第14表　処理重量と各篩残渣 …… 46
第15表　０φ（１mm）篩以上の岩石組成 …… 47
第16表　土壌プレス試料の化学組成 …… 47

図 版 目 次

図版１
１．調査前風景　２．１区表土剥ぎ風景　３．２区表土剥ぎ風景　４．１区遺構確認状況
５．２区遺構確認状況　６．838号土坑　７．907号土坑　８．908号土坑
図版２
１・２．425号住居跡遺物出土状態　３．425号住居跡Ｐ１　４．425号住居跡Ｐ２
５．425号住居跡赤色砂利層検出状況　６．425号住居跡赤色砂利層断面（M―M’）
７．425号住居跡赤色砂利層（中心部）検出　８．425号住居跡貯蔵穴
図版３
１．425号住居跡南コーナー付近　２．425号住居跡炉跡　３・４．425号住居跡
５．635号住居跡　６．635号住居跡西コーナー　７．635号住居跡貯蔵穴
８．635号住居跡炉跡
図版４
１・２．636号住居跡　３．636号住居跡貯蔵穴　４．636号住居跡炉跡
５・６．637号住居跡　７・８．44号溝跡遺物出土状態
図版５
１・２．44号溝跡遺物出土状態　３．44号溝跡土層断面（Ｈ－Ｈ’）
４．44号溝跡被熱硬化状況　５．44号溝跡（北から）　６．44号溝跡（南から）
７．28号住居跡カマド　８．28号住居跡
図版６
１．５号柵列状遺構（西から）　２．５号柵列状遺構（東から）
３．６号柵列状遺構（北から）　４．６号柵列状遺構（東から）
５．６号柵列状遺構（西から）　６．１区発掘風景　７．２区発掘風景
図版７
１．907号土坑出土遺物　２．425号住居跡出土遺物
図版８
１．635号住居跡出土遺物　２．636号住居跡出土遺物　３．637号住居跡出土遺物
４．44号溝跡出土遺物１
図版９
１．44号溝跡出土遺物２　２．６号柵列状遺構出土遺物　３．遺構外出土遺物
図版10
赤砂利層中の砂（０φ篩残渣）の実体顕微鏡写真

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　市域の地形と遺跡

（１）地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.05㎢、人口約７万５千人の自然と文化の調和する都市である。

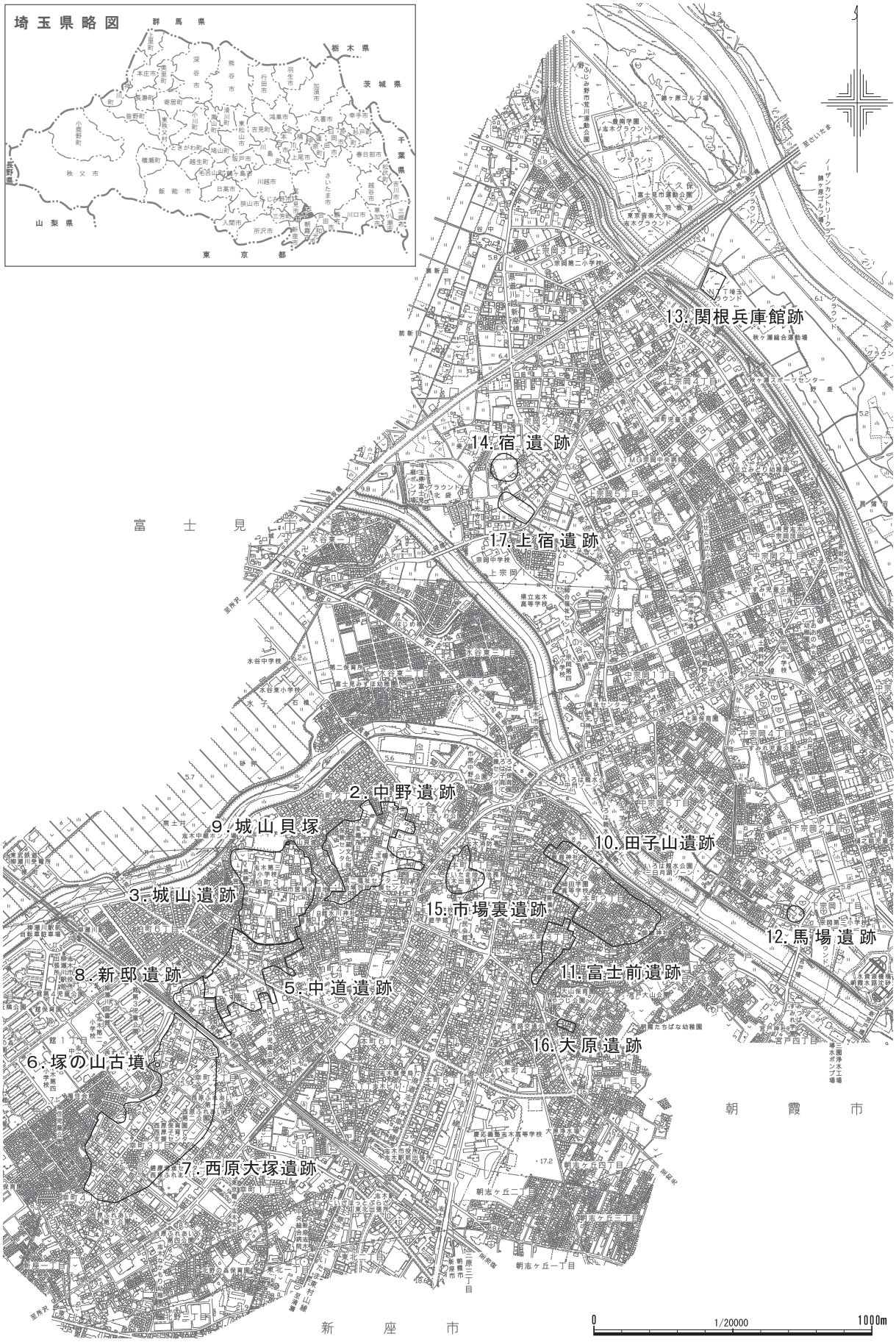
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の３本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚（にしはらおおつか）遺跡（７）、新邸（あらやしき）遺跡（８）、中道（なかみち）遺跡（５）、城山（しろやま）遺跡（３）、中野（なかの）遺跡（２）、市場裏（いちばうら）遺跡（15）、田子山（たごやま）遺跡（10）、富士前（ふじまえ）遺跡（11）、大原（おおはら）遺跡（16）

№.	遺跡名	遺跡の規模	地　目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中　　野	67,620㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城　　山	82,100㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中　　道	54,420㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古　墳？	古　墳？	古　墳？	なし
7	西 原 大 塚	164,960㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前・後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新　　邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前・後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城 山 貝 塚	900㎡	林	貝　塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田　子　山	74,030㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富　士　前	14,830㎡	宅　地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑？、溝跡？	弥生土器、土師器
12	馬　　場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900㎡	グランド	館　跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	水　田	館　跡	中世	溝跡、井桁状構築物	木・石製品
15	市　場　裏	13,800㎡	宅　地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大　　原	1,700㎡	宅　地	不　明	近世以降？	溝跡	なし
17	上　　宿	8,600㎡	水田・宅地	集落跡	平安、中・近世	住居跡、溝跡	土師器、須恵器
合　　計		519,240㎡					

令和２年12月28日現在

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



令和２年12月28日現在

第１図　市域の地形と遺跡分布（1／20,000）

と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡（17）が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳（６）、城山貝塚（９）を加えた15遺跡である（第１図・第１表）。

（２）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

１．旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で、礫群や石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成６（1994）年度には２ヶ所、平成７年（1995）度には１ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。最新では、令和元（2019）年に第224地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅶ層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。平成27（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91⑰地点からは、礫群１基が検出された。

また、城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の２ヶ所で石器集中地点が検出されている。平成20・21年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも１ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部で石器集中地点２ヶ所、礫群９基が検出された。令和元（2019）年には第96地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅵ層・第Ⅶ層で石器集中地点や礫群が検出されている。

２．縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成４（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器１点、平成６（1994）年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器３点、第22地点から爪形文系土器１点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器１点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2006）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡１軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山

遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で前期中葉の黒浜式期の住居跡が検出され、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。城山遺跡では、令和元（2019）年度に発掘調査が実施された第96地点から、前期後葉の諸磯期で、貝層を持つ住居跡が４軒検出された。住居内貝層からヤマトシジミ・マガキが検出されている。平成２年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曽利Ｅ式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡１軒が確認されているが、平成27（2016）年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曽利ＥⅣ式の両耳壷を出土する住居跡１軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡１軒と加曽利Ｂ式期の住居跡１軒、遺物集中地点１ヶ所、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居（敷石住居）１軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑１基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。最新資料として、平成26（2015）年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28（2016・2017）年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）の遺物が比較的まとまって出土している。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢＣ式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代中期まで空白の時代となる。

３．弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については令和元（2019）年に発掘調査された城山遺跡第96地点で市内初となる宮ノ台式期の住居跡１軒、方形周溝墓１基が検出された。住居跡からは壷、甕、高坏、抉入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土している。

弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27（2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壷形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が約600軒確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24（2012）年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅釧が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の３遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第８地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ１基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20ｍを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壷、吉ヶ谷式系の壷、在地系の壷などと大きく畿内・比企地域・在地の３要素の特徴を示す壷が出土している。なお、鳥形土製品１と壷形土器４点の計５点は、考古資料として市指定文化財に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

４．古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第２地点の１号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第８地点の２～８号住居跡は、古墳時代前期でも比較的に新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成７（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、５世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

５世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に６世紀後半から７世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的に古い５世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、６世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第８地点で初めて古墳時代後期（７世紀中葉）の住居跡が１軒検出されている。この住居跡は、３×3.5ｍの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、５世紀後半から７世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で約230軒、次いで中野遺跡で約55軒、中道遺跡と田子山遺跡で16軒ずつ、新邸遺跡で１軒を数える。

また住居跡以外では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、６世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7ｍの不整円形で２ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が１基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33ｍの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

５．奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成８（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」１文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片１点、布目瓦の小破片２点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶（ふじゅしんぽう）が２枚とその近くからは鉄鎌１点と土錘１点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成６（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群と南比企窯跡群の製品という生産地の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか９点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の冨壽神寶ほか２点の遺物は、考古資料として、平成25年３月１日付けで、市指定文化財に指定されている。

６．中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と大塚千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『舘村旧記（たてむらきゅうき）』（註１）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『廻国雑記（かいこくざっき）』（註２）に登場する「大石信濃守館（おおいししなのかみやかた）」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊（おおつかじゅうぎょくぼう）」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山　1988・2002）。

また、平成７（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成８（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鋳造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鋳造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、鍋本体の大型鋳型、鍋の耳部分の小型鋳型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成６（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧の札（よろい　さね）である鉄製品１点と鉄鏃１点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ピット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新た土坑45基・井戸跡２基・溝跡１本・ピット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「Ｔ字形」の火葬土坑５基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『舘村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第２地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成７（1995）年の第37地点からは、人骨と古銭５枚を出土した土坑墓１基と13世紀に比定される青磁盤１点を出土した道路状遺構１条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第１地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の第８地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓２基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『舘村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院（しょうりんざんかんのんじだいじゅいん）」関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、中道遺跡第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のピットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

７．近代以降

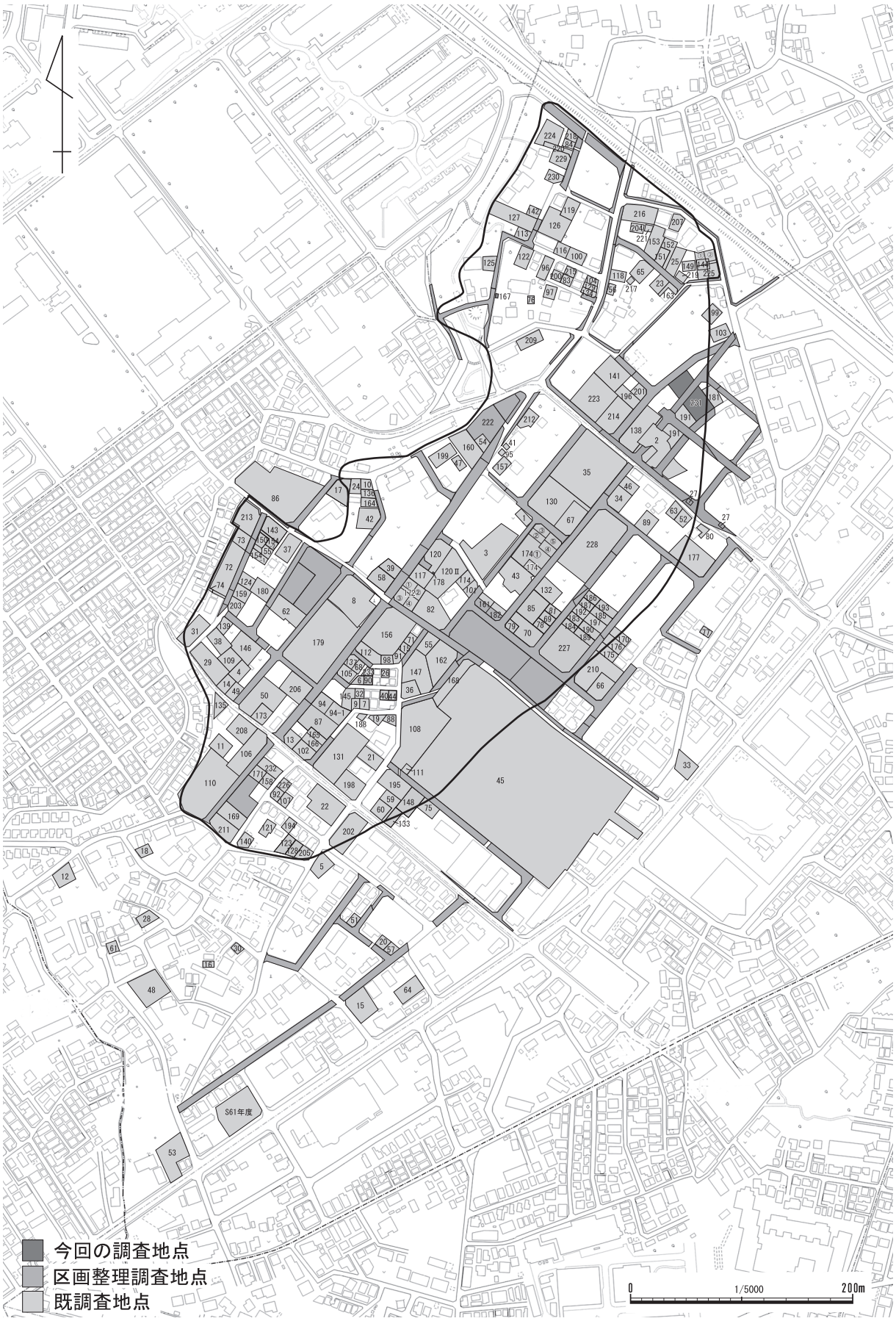
近代以降の遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治２～５年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第８地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第２節　遺跡の概要

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部にある幸町２～４丁目一帯に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約１kmに位置している。北東―南西方向に約700m、北西―南東方向に約150mの広がりをもち、遺跡面積164,960㎡の市内最大規模の遺跡である。

本遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の台地の縁辺に形成されている。標高は10～18mと遺跡内で８mの比高差があるが、遺跡範囲の大部分は標高14～16mに位置しており、おおむね緩やかな傾斜をもち台地から低地に移行している。遺跡北西部分の台地下では、今でも小規模な湧水点が確認されている。



令和２年12月28日現在

第２図　西原大塚遺跡の調査地点（1／5,000）

昭和48（1973）年に最初の調査が実施されて以降、志木市教育委員会、志木市遺跡調査会、志木市史編さん室による度重なる調査が実施されてきた。平成元（1989）年から平成19（2007）年までは、西原特定土地区画整理事業に伴い、道路新設部分を中心に公園予定地・保留地を対象とした発掘調査が継続的に実施された。

近年では区画整理事業の完了に伴い、小・中規模の共同住宅や分譲住宅、個人専用住宅の建設などの各種土木工事が増加傾向にあり、それに伴い確認調査・発掘調査件数は、令和２年12月28日現在で、233地点にのぼり、市内では最多件数となっている（第２図）。

これまでの調査の結果、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。特に、縄文時代中期では、住居跡約180軒からなる大規模な環状集落跡が形成されていることが判明しつつあり、弥生時代後期から古墳時代前期では、住居跡600軒以上と40基程の方形周溝墓が検出され、県内でも最大規模となる集落跡であると考えられる。

［註］

註１　『舘村旧記』は、舘村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒（なぬしみやはらなかえもんなかつね）が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註２　『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）６月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

［引用文献］

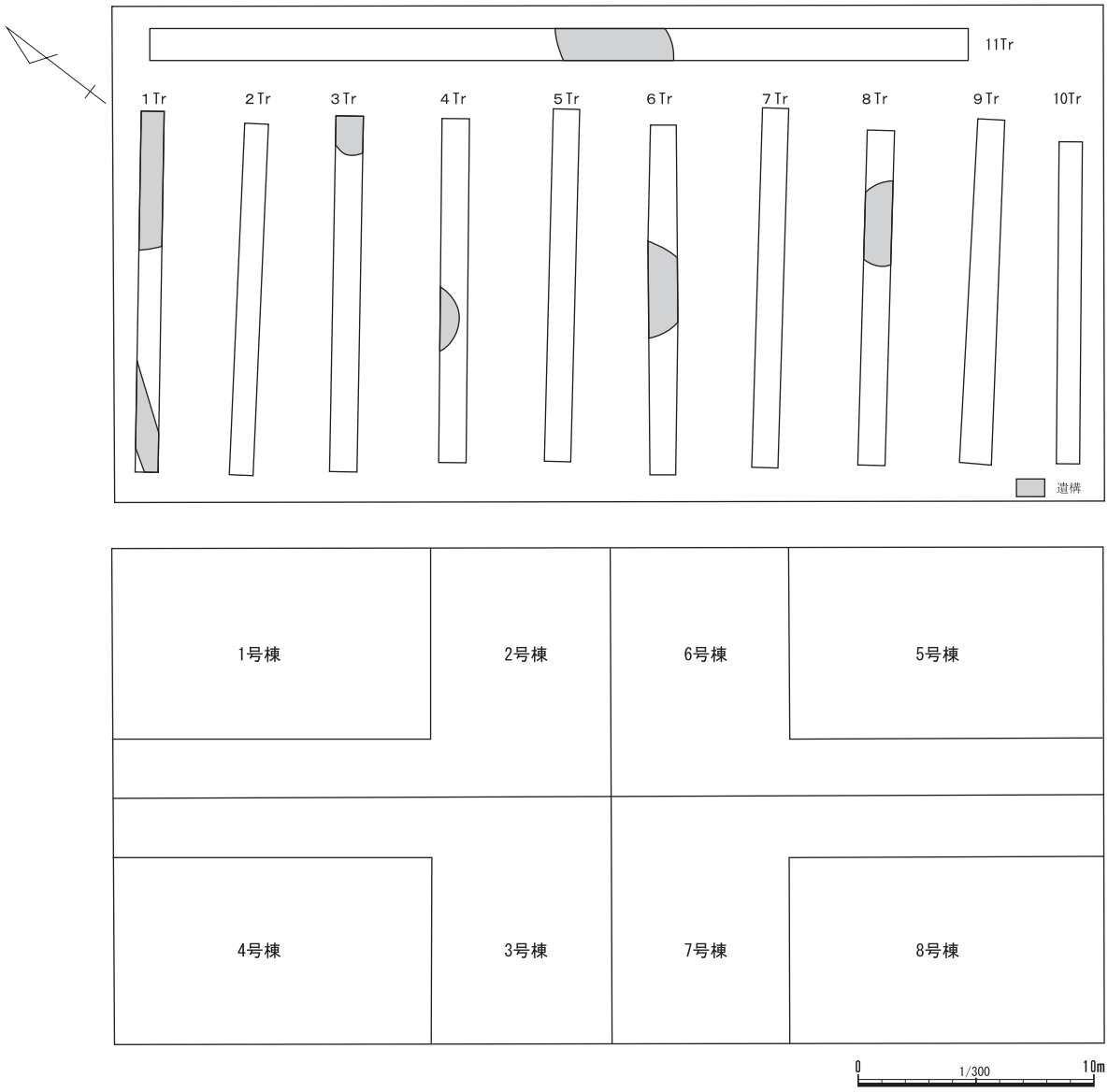
神山健吉　1988「「廻回雑記」に現れる　大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第７号
2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第２章　発掘調査の概要

第１節　調査に至る経緯

令和元年11月、土地所有者及び土木工事主体者である個人（以下、工事主体者）から志木市教育員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町２丁目6149・6150番（面積883.00㎡）地内に分譲住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は、当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228－09－007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。



第３図　確認調査時の遺構分布・全体計画（1／300）

１．埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

２．上記１の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず埋蔵文化財に影響を与える工事を実施する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

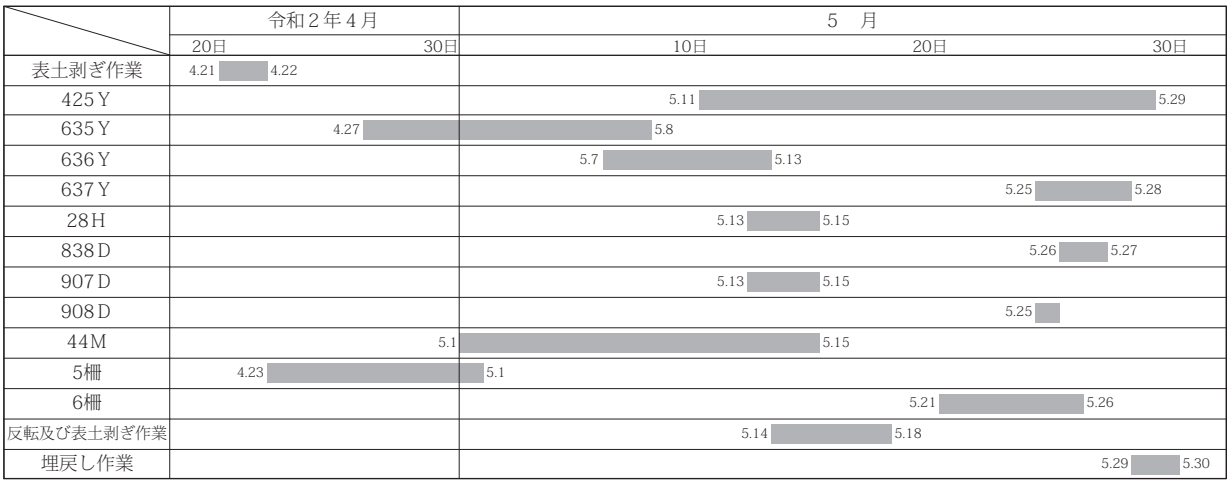
令和元年12月16日、教育委員会は、工事主体者より確認調査依頼書を受理し、本件の地点名を西原大塚遺跡第231地点として、令和２年１月21・22日の２日間で確認調査を実施した。確認調査では、第３図に示すように調査区内に11本のトレンチ（１～11Tr）を設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡６軒・溝跡１本を確認した。

教育委員会は、この結果をただちに工事主体者に報告し、保存措置について検討を依頼した。２月14日に工事主体者と埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。その結果、８棟建設予定のうち、２・３・６・７号棟については十分な文化財保護層が確保できるため、盛土保存としたが、１・４・５・８号棟および雨水浸透トレンチ部分については、十分な文化財保護層が確保できないことから、発掘調査を実施することに決定した。２月21日、工事主体者より志木市埋蔵文化財保存事業委託申請書が提出されたため、志木市埋蔵文化財保存事業受託要綱第２条第２項に基づき、４月13日に発掘調査実施に向けた事前協議を実施した。また、教育委員会は４月10日付けで埋蔵文化財発掘の届出及び発掘調査通知を埼玉県教育委員会に提出した。

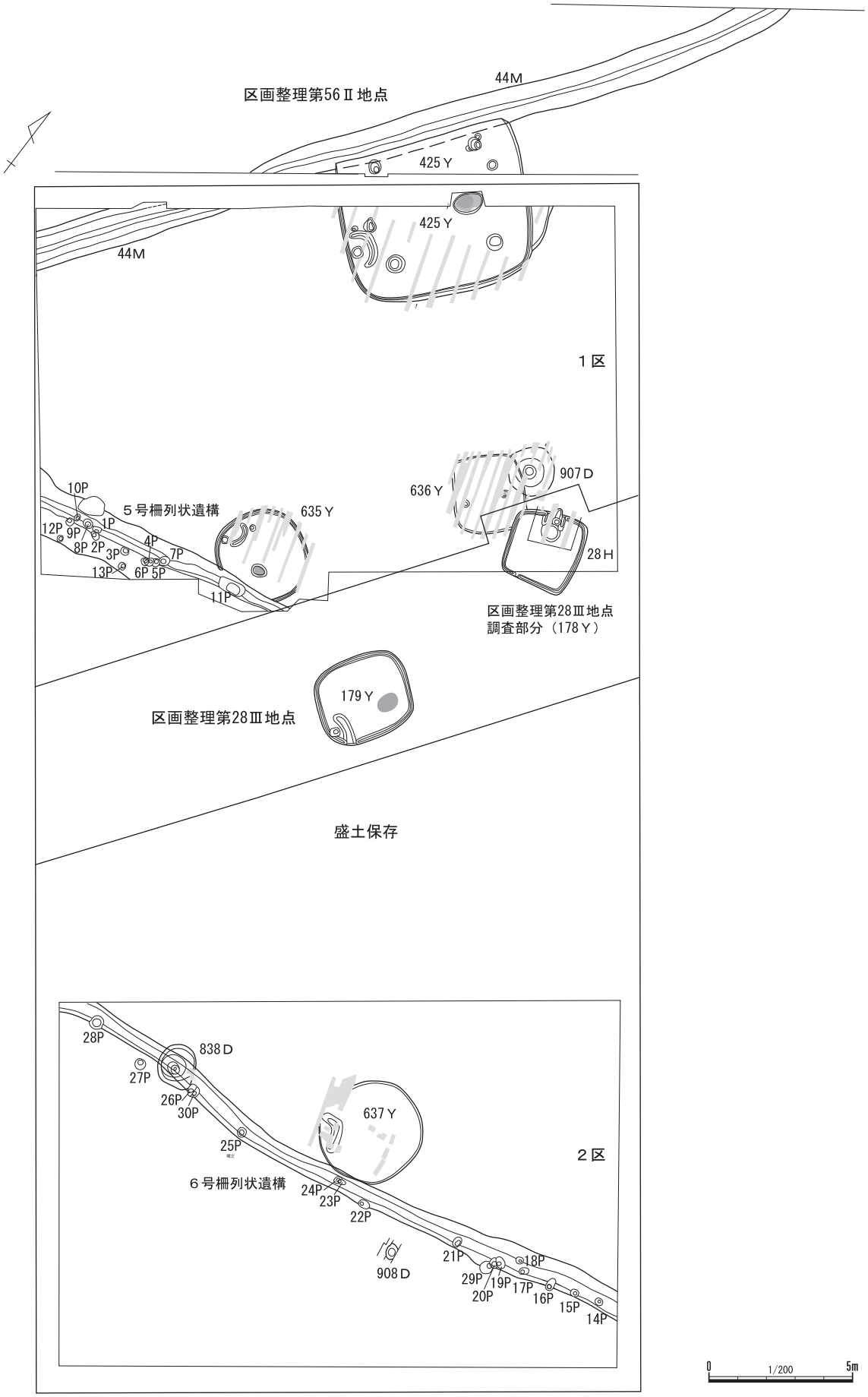
４月20日、志木市と土木工事主体者の間で志木市埋蔵文化財保存事業に係る協議書が取り交わされ、同時に委託契約を締結し、発掘調査を実施した。

第２節　発掘調査の経過

ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第２表の発掘調査工程表に示した。



第２表　西原大塚遺跡第231地点の発掘調査工程表



第４図　遺構分布図（1／200）

４月21日　発掘調査を開始する。調査区北西側を１区、調査区南東側を２区とした（第４図）。重機（バックホー）による表土剥ぎ作業を１区北端から開始する。同時に、人員を導入し、調査機材搬入、調査区整備、遺構確認作業を行う。残土置場を盛土保存部分に当てることとした。

22日　表土剥ぎ作業２日目。本日中に１区の表土剥ぎを終了した。

23日　１区の遺構検出状況の写真撮影を完了し、１区の遺構精査を開始する。中世の柵列状遺構（５柵）の精査を開始する。

24～30日　５柵の精査では、遺構内からピットが検出されたため、ピットの半截、断面記録を行った。５柵、ピットの平面図を作成する。弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（635Ｙ）の精査を開始する。

５月１～８日　５柵に伴うピットのエレベーション図を作成し、５柵の精査を終了する。弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（636Ｙ）・溝跡（44Ｍ）の精査を開始する。635Ｙの精査を終了する。

11～13日　弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（425Ｙ）の精査を開始する。44Ｍでは、底面まで検出し、断面形がＶ字状であることが分かった。636Ｙの精査を終了する。縄文時代の土坑（907Ｄ）の精査を開始する。636Ｙと重複していた178Ｙであったが、住居跡の北辺中央に凸出した平面形を確認した。覆土には粘土が堆積しており、カマドの煙道部と考えられた。よって、178Ｙを改め、古墳時代後期～平安時代の住居跡（28Ｈ）とし、カマド部分を対象に精査を開始した。

14日　２区の表土剥ぎ作業を開始する。１区では、44Ｍの壁面中腹付近に部分的に被熱硬化範囲が認められた。

15日　44Ｍ、28Ｈ、907Ｄの精査を終了する。１区の南西側半分の埋め戻し作業を行う。

18日　２区の表土剥ぎ作業を終了する。１区では、425Ｙで赤色砂利層を検出する。

20日　２区の調査区整備、遺構確認作業を行い、遺構検出状況の写真撮影を完了する。１区では、425Ｙの遺物出土状況の写真撮影を行う。

21～25日　中世の柵列状遺構（６柵）の精査を開始する。425Ｙでは赤色砂利層の土壌サンプリングを行う。また、炉跡付近を拡張し、炉跡の精査を行う。縄文時代の土坑（908Ｄ）、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（637Ｙ）の精査を開始する。

26～28日　縄文時代の土坑（838Ｄ）の精査を開始する。425Ｙでは、完掘写真撮影を行い、平面図作成後、掘り方の精査を行う。637Ｙでは、完掘後、記録作業を実施し、掘り方の調査を行い、精査を終了する。

29日　425Ｙの掘り方部分を断面図に追加し、精査を終了する。埋め戻し作業を開始する。

30日　本日中に埋め戻し作業を終了し、すべての調査を完了する。

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構・遺物

（1）概　要

本地点からは、縄文時代の遺構として、土坑３基（838・907・908 D）、ピット１本（25 P）が検出された。907D以外は、遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

（2）土　坑

838号土坑

遺　　構（第５図）

［位　　置］２区。

［検出状況］６柵に中央上部を削平され、26Pに南東コーナーの一部を切られる。東端の一部を撹乱される。

［構　　造］**平面形：**不整の円形。**規模：**径1.46ｍ／深さ56㎝。**壁：**45°～65°の角度で緩やかに立ち上がる。**その他：**底面に段差がみられ、中央やや南側でピット状の窪みが認められる。

［覆　　土］16層（２～17層）に分層された。外側から流れ込むような堆積を呈しており、自然堆積と考えられる。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から、縄文時代と思われる。

907号土坑

遺　　構（第５図）

［位　　置］１区。

［検出状況］636Yに南西コーナー上部を切られる。耕作による撹乱が著しい。

［構　　造］**平面形：**円形。**規模：**径1.73ｍ／深さ46㎝。**壁：**セクションＡ－Ａ’では急斜に立ち上がり、セクションＢ－Ｂ’では緩やかに立ち上がる。**その他：**底面にはやや凹凸が認められる。

［覆　　土］６層に分層された。外側から流れ込むような堆積を呈しており、自然堆積と考えられる。

［遺　　物］覆土中から前期中葉の黒浜式土器片が１点出土した。

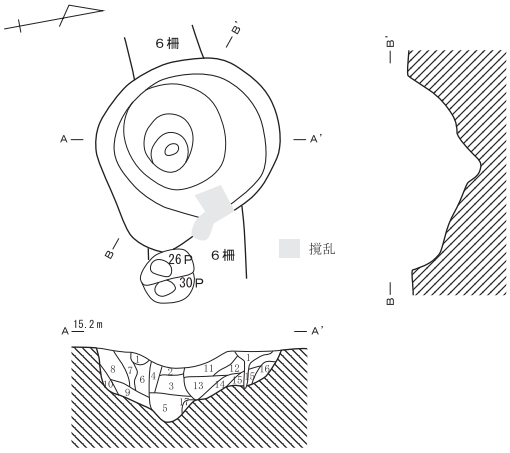
［時　　期］前期中葉（黒浜式期）。

遺　　物（第５図、図版７－１）

１は黒浜式土器で、深鉢の胴部破片である。厚さは0.7㎝。僅かに湾曲する。外面に単節斜縄文（LRか）が施される。色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土には繊維を僅かに含む。

908号土坑

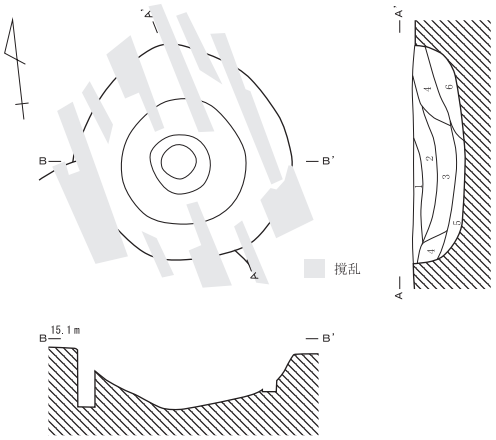
遺　　構（第５図）



838号土坑

１層　撹乱。
２層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
３層　黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。
４層　明茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含む。しまり強。
５層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。
６層　暗黄褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロック多くを含む。しまり強。
７層　明茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロック多くを含む。しまり強。
８層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
９層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
10層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
11層　明茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。
12層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
13層　明茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。
14層　明茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
15層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
16層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
17層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。

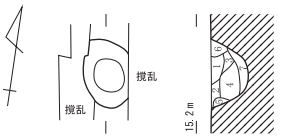
0　1/60　2m



１層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
２層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
３層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
４層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
５層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
６層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。

907号土坑

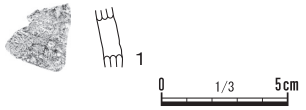
0　1/60　2m



１層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
２層　暗茶褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む。しまり強。
３層　暗茶褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む。しまり強。
４層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
５層　明茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。
６層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
７層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、ロームブロックを含む。しまり強。

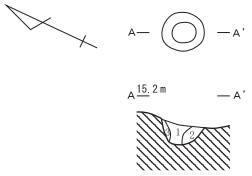
0　1/60　2m

908号土坑



907号土坑出土遺物

第５図　土坑・907号土坑出土遺物（1／60・1／3）



１層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
２層　明茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり強。
３層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、ロームブロックを含む。しまり強。

0　1/60　2m

第６図　25号ピット（1／60）

［位　　置］２区。
［検出状況］東西の端部を耕作によって撹乱される。
［構　　造］**平面形**：楕円形を呈すると思われる。**規模**：長軸0.56ｍ／短軸不明（現存値0.35ｍ）／深さ30㎝。**壁**：65°～70°の角度で直線的に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－23°－Ｗ。
［覆　　土］７層に分層された。外側から流れ込むような堆積を呈しており、自然堆積と考えられる。
［遺　　物］出土しなかった。
［時　　期］覆土の観察から、縄文時代と思われる。

（３）ピット

本地点から検出されたピットは30本であったが、そのうち、１本（25Ｐ）は覆土の観察から縄文時代のものと考えられる。出土遺物はなかった。

25号ピット

遺　　構（第６図）
［位　　置］２区。
［検出状況］６柵に上層を切られる。
［構　　造］**平面形**：楕円形。**規模**：長軸34㎝／短軸30㎝／深さ30㎝。
［覆　　土］３層に分層された。
［遺　　物］出土しなかった。
［時　　期］覆土の観察から、縄文時代と思われる。

第２節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

（１）概　要

今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、住居跡４軒（425・635～637Ｙ）・溝跡１本（44Ｍ）が検出された。44Ｍについては、すでに区画整理第56Ⅱ地点（佐々木・内野・宮川　2009）で一部調査されており、区画整理第56Ⅰ地点（佐々木・内野・宮川　2009）と西原大塚遺跡第138地点（尾形・深井・青木　2008）の40Ｍと同一遺構と考えられる。

（２）住居跡

425号住居跡

遺　　構（第７～９図）
［位　　置］１区。
［検出状況］区画整理第56Ⅱ地点で44Ｍに切られる。耕作による撹乱を受けている。
［構　　造］**平面形**：隅丸方形と思われる。なお、本調査地点側で北東側に深さ10～12㎝のテラス状の掘り込みが認められた。**規模**：長軸7.26ｍ／短軸不明（現存長5.46ｍ）／遺構確認面からの深さ46～52㎝。**壁**：85°程度で立ち上がる。**主軸方位**：Ｎ―38°―Ｗ。**壁溝**：本調査地点側では確認された。

上幅13～26㎝／下幅４～10㎝／深さ３～７㎝。**床面**：主柱穴の内側を中心に住居北東側～南西側にかけて硬化面が確認された。**炉**：住居中央からやや北東壁に寄って位置する。長軸107㎝・短軸75㎝の楕円形を呈する地床炉で、掘り込みの深さは２～７㎝。底面は厚さ６㎝程度に被熱赤化していた。**貯蔵穴**：住居南コーナー付近から検出された。37×30㎝の隅丸方形を呈し、深さは23㎝。覆土は３層に分層される。周囲には幅28㎝程で高さ２～５㎝の凸堤が「コ」字状に巡らされている。**柱穴**：主柱穴はＰ１～４の４本と考えられる。Ｐ１は57×55㎝の円形で、深さ59㎝。Ｐ２は67×63㎝の円形で、深さ70㎝。Ｐ３・４は区画整理第56Ⅱ地点で調査されたものである。Ｐ３は50×43㎝の円形で深さ58㎝。Ｐ４は46×44㎝の円形で、深さ54㎝。柱底から25㎝上の箇所で段差を有する。**赤色砂利層**：貯蔵穴の東側の住居南コーナーから検出された。検出範囲は183×137㎝程で、Ｐ２、凸堤の一部と重複していた。検出範囲の中でも土層の観察から特に小砂利を多く含む範囲（中心部）を60×54㎝、高さ12㎝で確認した。**入口施設**：Ｐ５・６は入口梯子穴と考えられる。住居中央南西壁際で貯蔵穴、凸堤の西脇で検出された。Ｐ５は51×44㎝の不整楕円形で、深さ46㎝。Ｐ６は24×17㎝の円形で、深さ18㎝。**掘り方**：南壁際の一部は直床であるが、それ以外は３～11㎝の深さの掘り込みが確認できた。

［覆　　土］住居覆土は76層（２～77層）に分層される。全体的にしまりが強く、特に南壁付近から中央にかけての覆土上～中層にしまりが非常に強い土層（セクションＣ－Ｃ’の30・33・35・47・48層）が認められた。また、黒褐色土・暗褐色土の間に黄褐色土・茶褐色土（セクションＣ－Ｃ’の５～７・30・35・47・48層）を主とする層が入り込んでおり、人為堆積の可能性がある。なお、テラス状の掘り込み部から住居内にかけては一連の堆積土となっている。Ｐ１覆土は下層（３・４層）が黄褐色土を主体とし、Ｐ２の覆土も下層（４・５層）が黄褐色土を主体とする。Ｐ１・２ともに下層がローム土で充填されたような状況であった。赤色砂利層の覆土については、10・11層は特に小砂利を多く含む層（中心部）で、分層の結果、マウンド状の分層線となった。周辺の覆土の堆積状況とは異なり、赤色砂利層の堆積（構築）時の中心部分と想定される。赤色砂利層の分析については付編（45ページ）を参照。

［遺　　物］壷・甕形土器とミニチュア土器が出土した。なお、２の土器は今回の報告で統合する際に既報告資料を見直した結果、接合ができたため、再度掲載した。３はＰ３近くからの出土で、追加資料である。また、44Ｍと接合した土器３点は44Ｍ－６（第18図６）として掲載した。４は炉からの出土で、６は凸堤の直上からの出土である。13の磨石は住居内撹乱からの出土である。

［時　　期］弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

遺　　物（第10図、図版７－２、第３表）

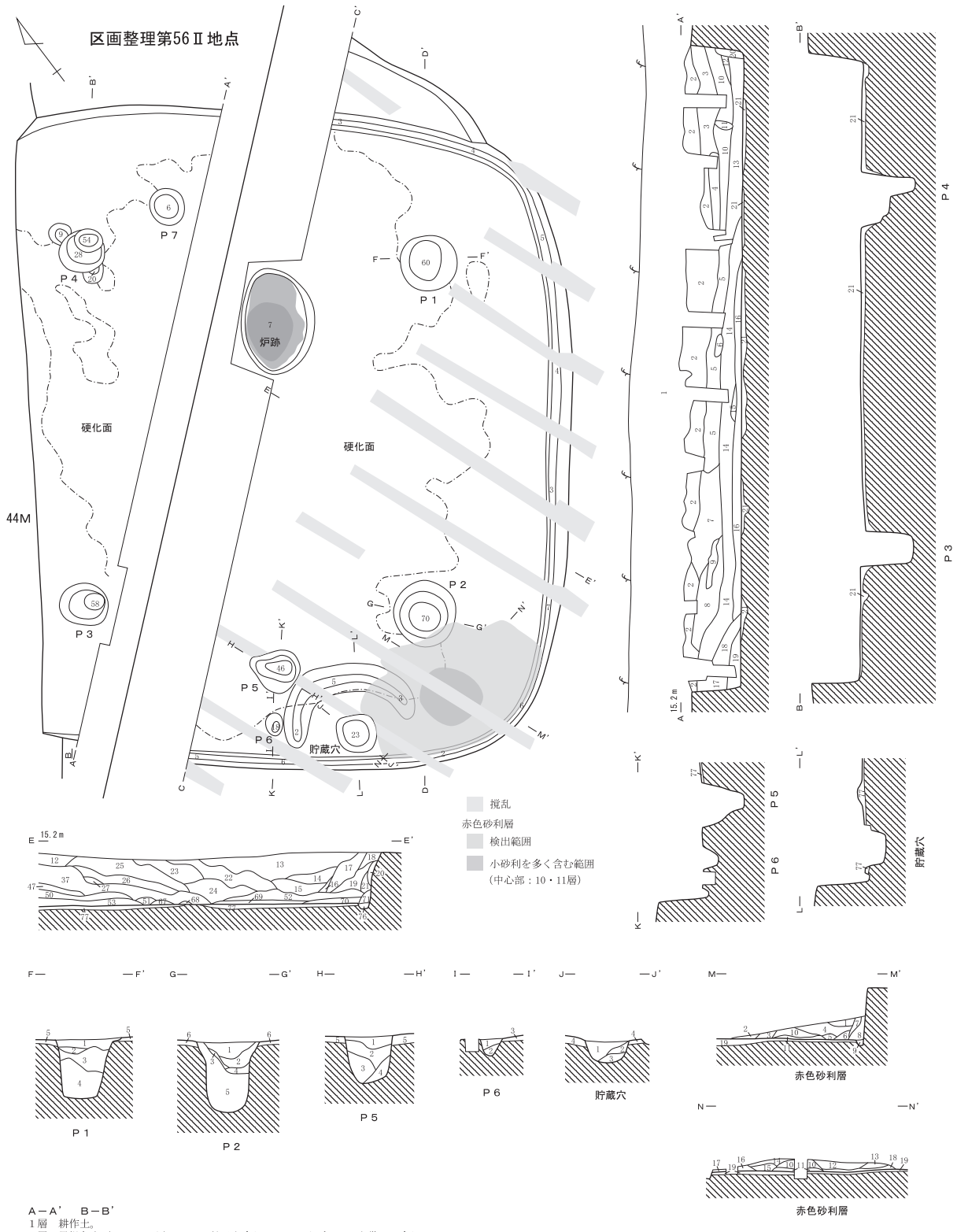
１・２は既報告資料（佐々木・内野・宮川　2009）であり、３は区画整理第56Ⅱ地点側で出土し、未報告であったため、ここで報告する。今回の調査で出土した遺物は４～13である。

［土　　器］（第10図１～12、図版７－２－１～12、第３表）

１・２・４・５・10・11は甕形土器、３・６～９は壷形土器、12はミニチュア土器である。

［石　　器］（第10図13、図版７－２－13）

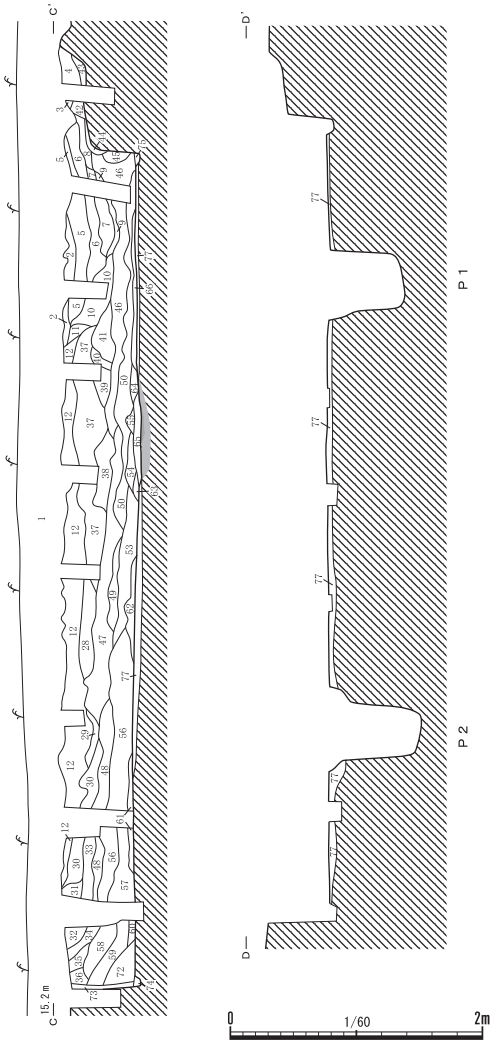
13は砂岩製の磨石で、完形である。長さ7.10㎝、幅4.41㎝、厚さ2.85㎝、重量163.6ｇ。方形を呈し、全面が研磨されている。正面右下側縁に連続した横方向の擦痕が認められる。



Ａ－Ａ’　Ｂ－Ｂ’
１層　耕作土。
２層　黒褐色土（7.5ＹＲ3/2）　ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
３層　黒褐色土（10ＹＲ3/1）ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
４層　黒褐色土（2.5Ｙ3/2）　ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
５層　灰黄褐色土（10ＹＲ4/2）ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
６層　黒褐色土（2.5ＹＲ3/2）ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
７層　暗褐色土（10ＹＲ3/3）　ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
８層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）ロームブロックを多く含む。硬質。
９層　黒褐色土（10ＹＲ3/1）ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
10層　黒褐色土（10ＹＲ3/1）ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
11層　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）　ロームブロック。硬質。
12層　黒褐色土（10ＹＲ3/1）ローム粒子を多く含む。やや硬質。
13層　黒褐色土（2.5Y3/1）ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。硬質。
14層　黒褐色土（10ＹＲ3/2）ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。硬質。
15層　暗灰黄色土（2.5Y4/2）ロームブロック。硬質。
16層　黒褐色土（10ＹＲ3/1）ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
17層　黒褐色土（2.5Y3/1）ローム粒子を多く含む。硬質。
18層　黒色土（7.5ＹＲ2/1）ローム粒子を含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。
19層　黒褐色土（2.5Y3/2）ローム粒子を多く含む。やや硬質。
20層　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）ローム粒子を多く含む。やや粘質。
21層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。

0　1/60　2m

第７図　425号住居跡（1／60）



F－F’（Ｐ１）
１層　黒褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む。しまりやや強。
２層　明茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまりやや強。
３層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまりやや強。
４層　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり強。
５層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。貼床。

G－G’（Ｐ２）
１層　暗褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまりやや強。
２層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含み、ロームブロックをやや多く含む。しまり中。
３層　暗黄褐色土　ローム粒子・ロームブロックを含み、ローム小ブロックを多く含む。しまりやや強。
４層　黄褐色土　ローム小ブロックを含み、ロームブロックを多く含む。しまりやや強。
５層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。
６層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。貼床。

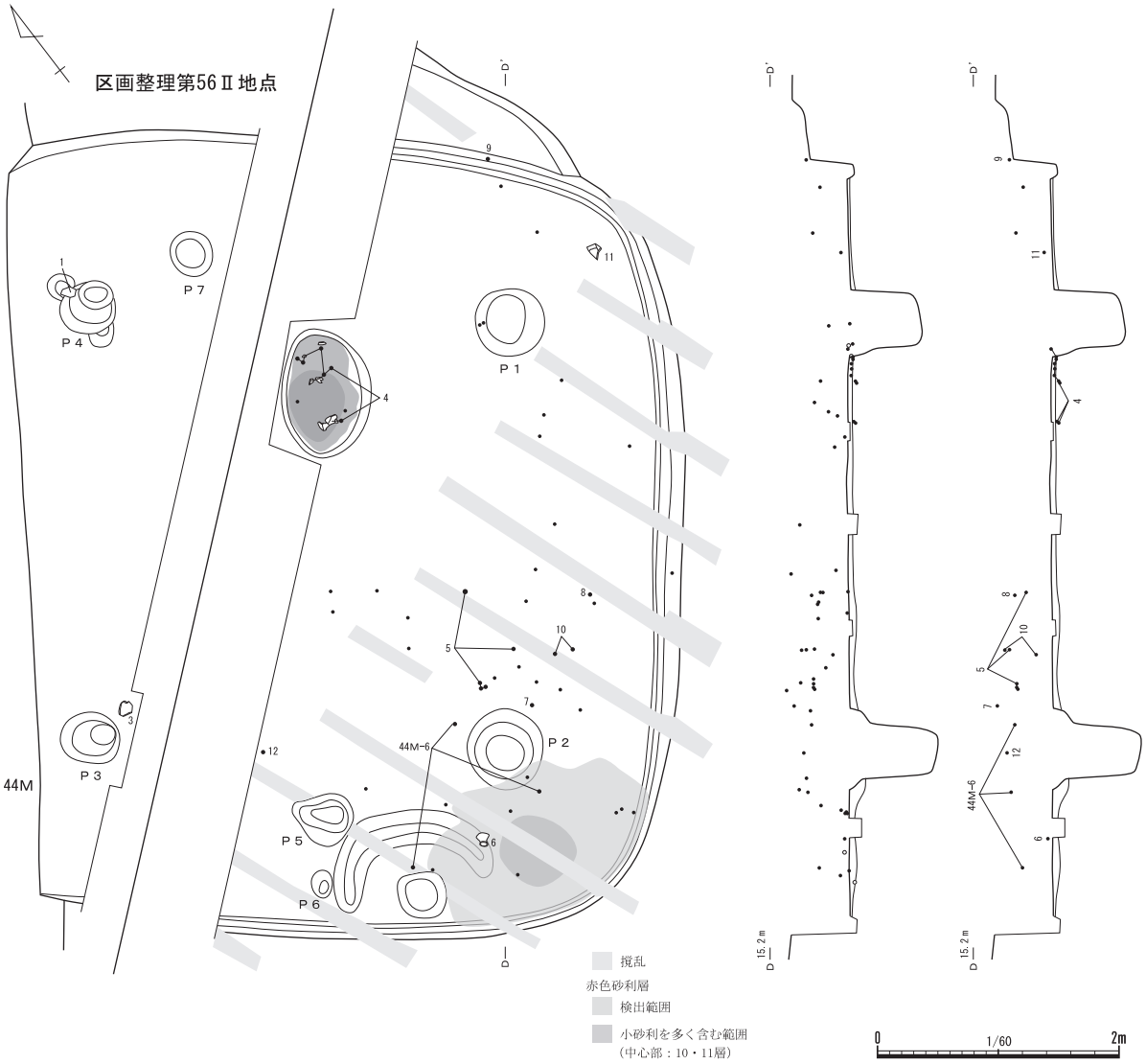
H－H’（Ｐ５）
１層　黒褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまりやや強。
２層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く、ロームブロックを含む。しまり中。
３層　黄褐色土　ローム小ブロックを含み、ロームブロックを多く含む。しまりやや強。
４層　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり強。
５層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。貼床。

I－I’（Ｐ６）
１層　黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまりやや強。
２層　黄褐色土　ローム小ブロックを含み、ロームブロックを多く含む。しまり強。
３層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。貼床。

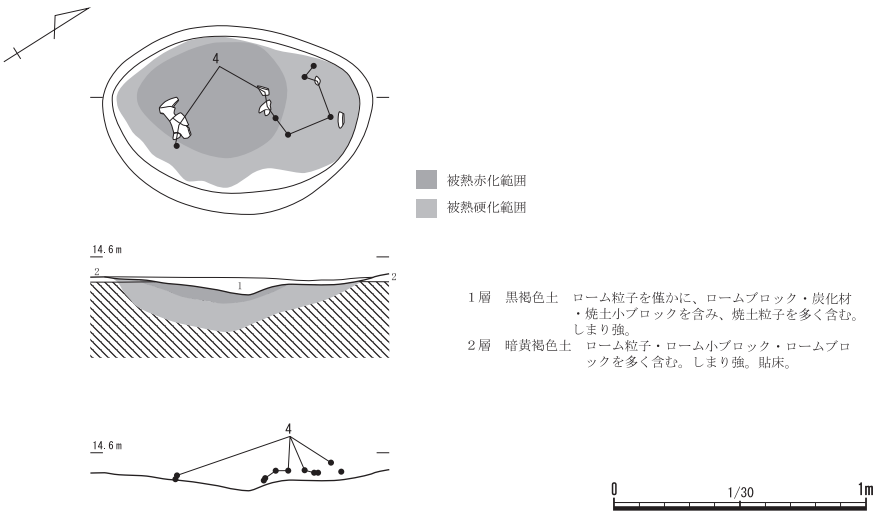
J－J’（貯蔵穴）
１層　黒褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロック・ロームブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む。しまり中。
２層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり中。
３層　暗褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり中。
４層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。貼床。

C－C’　D－D’　E－E’　K－K’　L－L’
１層　表土及び撹乱。
２層　暗褐色土　ローム粒子を僅かに含む。しまり中。
３層　茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含む。しまり中。
４層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。しまり中。
５層　明茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含み、ロームブロックを僅かに含む。しまり中。
６層　にぶい黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、ロームブロックを含む。しまりやや強。
７層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまりやや強。
８層　暗茶褐色土　ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。しまりやや強。
９層　茶褐色土　ローム粒子を僅かに、ローム小ブロックを含む。しまりやや強。
10層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを僅かに含む。しまりやや強。
11層　暗褐色土　ローム粒子を僅かに含む。しまり中。
12層　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。しまり中。
13層　黒褐色土　ローム粒子を僅かに含む。しまりやや強。
14層　黒褐色土　ローム粒子を僅かに含む。しまり強。
15層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
16層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。しまり強。
17層　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
18層　暗褐色土　ローム小ブロックを含む。しまり強。
19層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
20層　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり強。
21層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
22層　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。しまりやや強。
23層　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまりやや強。
24層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。しまり強。
25層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く、ロームブロックを含む。しまり中。
26層　暗褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む。しまりやや強。
27層　暗褐色土　ローム粒子を含み、ロームブロックを多く含む。しまりやや強。
28層　暗褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを僅かに含む。しまりやや強。
29層　暗茶褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む。しまり強。
30層　茶褐色土　ローム小ブロックを多く、ロームブロックを含む。しまり非常に強。
31層　暗茶褐色土　ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。しまり中。
32層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。しまりやや強。
33層　黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり非常に強。
34層　暗褐色土　ローム粒子を僅かに含む。しまりやや強。
35層　暗褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含む。しまり非常に強。
36層　暗褐色土　ローム粒子を僅かに含む。しまり強。
37層　黒褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む。しまりやや強。
38層　暗褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含む。しまり強。
39層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
40層　明茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含む。しまり強。
41層　茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまりやや強。
42層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまりやや強。
43層　明茶褐色土　ローム粒子を僅かに含む。しまりやや強。
44層　茶褐色土　ローム粒子・ロームブロックを含む。しまり強。
45層　明茶褐色土　ローム粒子・ロームブロックを含む。しまり中。
46層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり強。
47層　茶褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり非常に強。
48層　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり非常に強。
49層　黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり強。
50層　暗茶褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
51層　暗茶褐色土　ローム粒子・ロームブロックを含む。しまりやや強。
52層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。しまり強。
53層　茶褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む。しまり非常に強。
54層　茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含む。しまり非常に強。
55層　暗茶褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。しまり中。
56層　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子を含み、ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
57層　黒褐色土　ローム粒子をやや多く、ロームブロックを多く含む。しまり非常に強。
58層　暗褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含み、炭化物粒子・焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
59層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く、ロームブロックを僅かに含む。しまり強。
60層　明茶褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む。しまり強。
61層　茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり非常に強。
62層　茶褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含む。しまり非常に強。
63層　暗茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
64層　暗茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。しまり中。
65層　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子を含み、ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。しまり強。
66層　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子を含む。しまり強。
67層　茶褐色土　ローム粒子を僅かに含む。しまり強。
68層　茶褐色土　ローム小ブロックを多く含む。しまり強。
69層　茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ロームブロックを僅かに含む。しまり強。
70層　暗黄褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含む。しまり非常に強。
71層　黄褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含む。しまりやや強。
72層　黒褐色土　ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり強。
73層　茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり中。
74層　暗黄褐色土　ローム粒子をやや多く含む。しまり弱。
75層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまりやや強。
76層　黄褐色土　ローム粒子を僅かに、ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり強。
77層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。貼床。

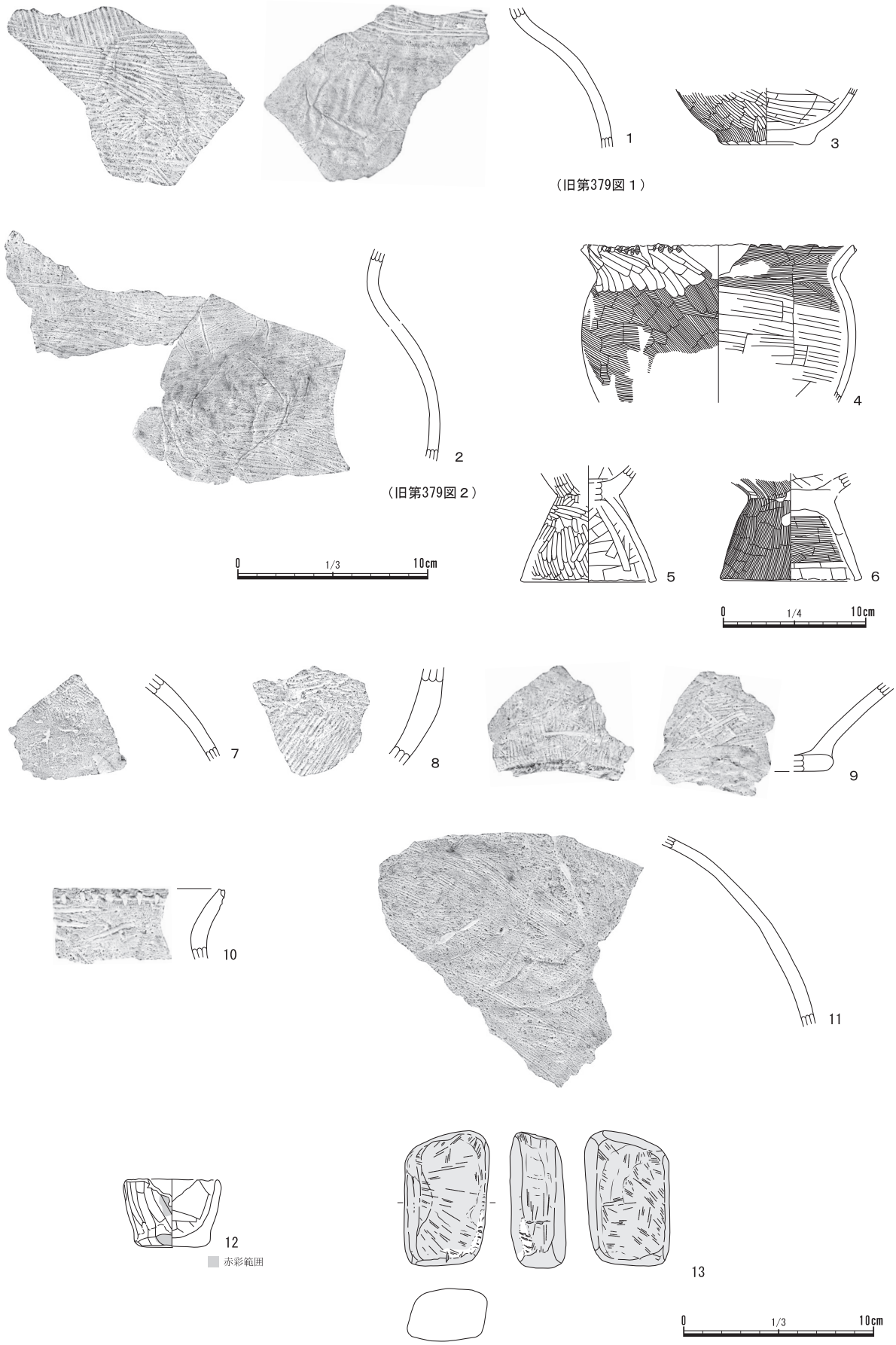
M－M’　N－N’
１層　暗茶褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロック・小砂利を僅かに含む。しまりやや強。
２層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含み、小砂利を僅かに含む。しまりやや強。
３層　暗黄褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含み、小砂利を僅かに含む。しまり強。
４層　暗褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロック・焼土粒子・小砂利を僅かに含む。しまり強。
５層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを僅かに、小砂利を含む。しまり強。
６層　明茶褐色土　ローム粒子を僅かに、ローム小ブロック・ロームブロック・小砂利を含む。しまり強。
７層　明茶褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含み、小砂利を僅かに含む。しまり強。
８層　明茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含み、小砂利を僅かに含む。しまりやや強。
９層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。しまり弱。壁溝覆土。
10層　赤茶褐色土　ローム粒子を僅かに、ローム小ブロック・ロームブロック・小砂利を多く含む。砂質強い。しまり強。
11層　茶褐色土　ローム粒子を僅かに、小砂利を多く含む。砂質強く、粘性あり。しまり非常に強。
12層　茶褐色土　ローム粒子・ロームブロック・小砂利を僅かに含む。しまり強。
13層　茶褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含み、小砂利を僅かに含む。しまりやや強。
14層　黒褐色土　ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含み、焼土粒子・小砂利を僅かに含む。しまり中。
15層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・小砂利を含む。砂質あり。しまり強。
16層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子を僅かに、小砂利を含む。砂質あり。しまりやや強。
17層　黄褐色土　ローム小ブロック・ロームブロックを含み、小砂利を僅かに含む。しまりやや強。
18層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含み、ロームブロックを多く含む。しまり強。
19層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり強。貼床。



第８図　425号住居跡遺物出土状態（1／60）



第９図　425号住居跡炉跡（1／30）



第10図　425号住居跡出土遺物（1／3・1／4）

挿図番号 図版番号	器種	法量 (㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調整等	出土位置	遺存度
第10図1 図版7-2-1 (旧第379図1)	甕	厚 0.6	頸部は緩やかに外反する／外面は全体的に黒く煤けている	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・黒色粒子・砂粒を僅かに含む	内面：頸部はハケ目調整、以下はヘラナデ／外面：ハケ目調整	区画整理56Ⅱ地点425YのP4縁の床面レベル	頸部～胴部上半破片
第10図1 図版7-2-1 (旧第379図2)	甕	厚 0.7	頸部は緩やかに外反する／外面は全体的に黒く煤けている／再整理の結果、破片１点が接合	胎土は淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：頸部は粗いハケ目調整、以下はヘラナデ／外面：粗いハケ目調整	区画整理56Ⅱ地点425Yからの床面上	頸部～胴部中位破片
第10図3 図版7-2-3	壷	高 [4.0] 底 6.8	小型壷／底部は輪台状に外縁部がやや高くなっている／外面に赤彩／再整理の結果の追加資料	胎土は暗赤褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子を非常に多く含む	内面：粗いヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	区画整理56Ⅱ地点425YのP3近くの床面上	胴部下半～底部70％
第10図4 図版7-2-4	甕	高 [11.3] 口 (19.4)	口縁部は外反する／口唇部にハケ状工具による刻み目がまわる／口縁部と胴部上半のほぼ同位置に最大径をもつ	暗茶褐色を基調	砂粒を含む	内面：口縁部～胴部上半はハケ目調整、胴部は中位がハケナデ、下半はヘラナデか／外面：口縁部は指によるナデ、胴部はハケ目調整	炉跡	口縁部～胴部下半20％
第10図5 図版7-2-5	甕	高 [8.2] 底 9.5	「ハ」字状の脚台部／端部は平坦	暗橙色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：ハケナデ／外面：粗いヘラ磨き調整	P2北側の覆土中（床上22～36㎝）から散在的	胴部下半～脚台部70％
第10図6 図版7-2-6	壷	高 [7.6] 底 10.0	「ハ」字状の脚台部／端部は平坦	暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：ハケ目調整後、底部付近ヘラナデ／外面：ハケ目調整	入口凸堤東端直上	脚台部のみほぼ完形
第10図7 図版7-2-7	壷	厚 0.7	文様は胴部上半にRL単節斜縄文／外面は赤彩	胎土は黄褐色を基調	橙色粒子・砂粒を含む	内面：ヘラナデ／外面：無文部はハケ目調整後ヘラ磨き調整	Ｐ２東側の覆土中(床上47㎝)	胴部上半破片
第10図8 図版7-2-8	壷	厚 1.0	胴部下半はやや「く」字状に屈曲する	暗茶黄褐色を基調	黄褐色粒子・橙色留意をやや多く含む	内面：ヘラナデ／外面：粗いハケ目調整	北西壁近くの覆土中(床上31㎝)	胴部下半破片
第10図9 図版7-2-9	壷	高 [4.6]	底部は平底／底部に木葉痕	黄褐色を基調	砂粒を含み、黄褐色粒子を僅かに含む	内外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	住居東コーナー壁際の覆土中(床上36㎝)	胴部下半～底部破片
第10図10 図版7-2-10	甕	厚 0.7	口唇部は平坦に面取り／口唇部外面に刻み／内外面はやや黒く煤けている	淡茶褐色	黄褐色粒子・砂粒・小石を含む	内外面：粗いヘラ磨き調整／外面口縁部は指頭による押捺痕が見られる	P2東側の覆土中（床上13・40㎝）	口縁部破片
第10図11 図版7-2-11	甕	厚 0.7	胴部は球状を呈する／外面は全体的に黒く煤けている	胎土は淡茶褐色を基調	砂粒を含み、黄褐色粒子を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整	住居東コーナーの覆土中(床上4㎝)	胴部上半～下半破片
第10図12 図版7-2-12	ミニチュア土器	高 3.6 口 (5.0) 底 3.5	器形は底部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がる／平底／外面に２か所赤色塗料の付着が見られるため、外面はもともと赤彩が施されていたものか	暗茶褐色	砂粒を含む	内面：ヘラナデ／外面：粗いヘラ磨き調整、底部立ち上がり部はヘラ削り	入口ピット（Ｐ５）の北側の覆土中(床上36㎝)	60%

第３表　425号住居跡出土土器一覧

635号住居跡

遺　　構（第11図）

［位　　置］１区。

［検出状況］住居南側を５柵に切られる。耕作による撹乱を受けている。遺存状態は悪い。

［構　　造］**平面形**：円形。**規模**：直径3.26ｍ／遺構確認面からの深さ７～13㎝。**壁**：70°程度で立

ち上がる。**主軸方位**：N―56°―W。**壁溝**：確認できた範囲では全周する。上幅12～15㎝・下幅４～６㎝・深さ４～８㎝。**床面**：壁際を除き硬化した面を確認できた。**炉**：住居中央からやや南壁に寄って位置する。長軸56㎝・短軸45㎝の楕円形を呈する地床炉で、掘り込みの深さは４㎝程度、厚さ６㎝程度に被熱赤化していた。**貯蔵穴**：住居西側の壁溝際から検出された。北東上端の一部に撹乱を受ける。27×25㎝の隅丸方形を呈し、深さは22㎝。覆土は２層に分層される。貯蔵穴の北側に幅20㎝程で高さ３㎝程度の弧状の凸堤が認められる。**柱穴**：主柱穴は検出されなかった。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：Ｐ１が入口梯子穴と考えられる。住居中央北西壁際で、凸堤の北脇で検出された。23×22㎝の円形で、深さ20㎝。**掘り方**：住居全体に４㎝～10㎝の深さの掘り込みが確認できた。

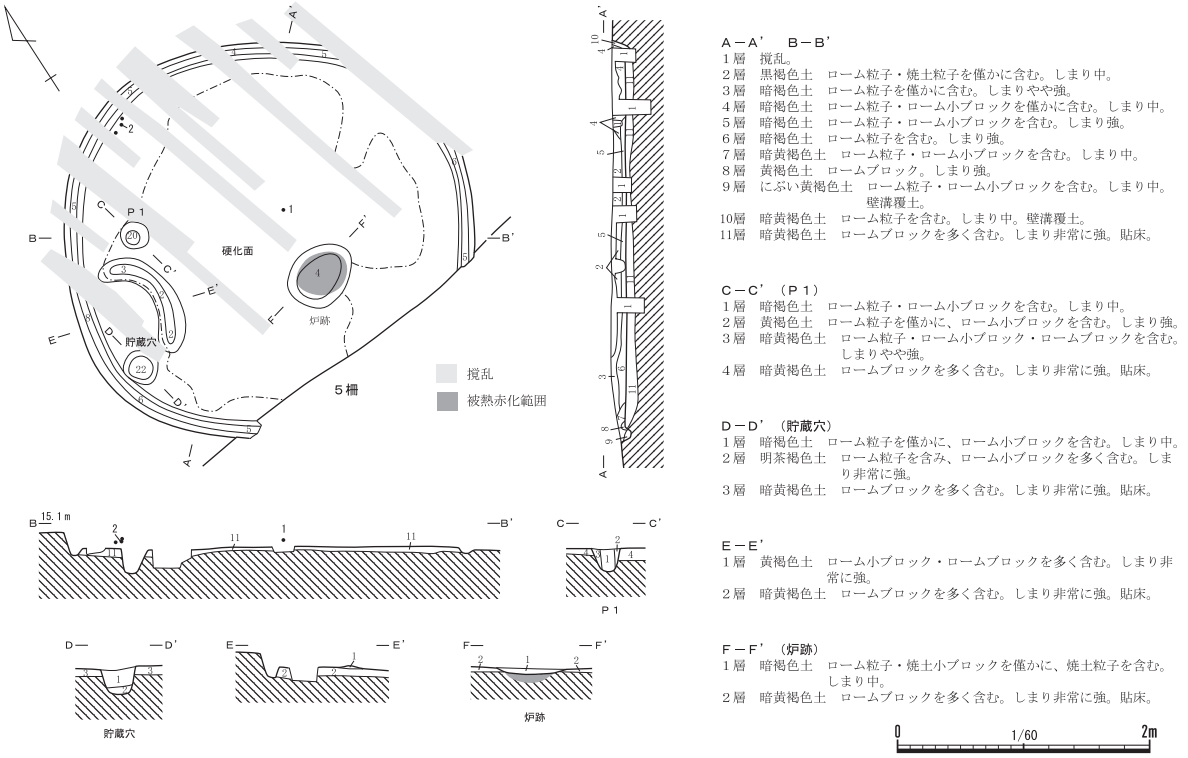
［覆　　土］10層（２～11層）に分層される。黒褐色土・暗褐色土（２～６層）を主体とし、堆積状況から自然堆積と考えられる。

［遺　　物］甕形土器の破片が僅かに出土した。いずれも覆土中からの出土である。

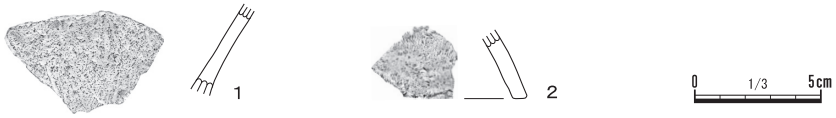
［時　　期］弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

遺　　物（第12図、図版８－１、第４表）

１・２は甕形土器である。



第11図　635号住居跡（1／60）



第12図　635号住居跡出土遺物（1／3）

挿図番号 図版番号	器種	法量 (cm)	特　　徴	色　調	胎　土	調整等	出土位置	遺存度
第12図1 図版8-1-1	甕	厚 0.6	下半には脚台部が付くものと思われる／外面は黒く煤けている	暗茶褐色	黄褐色粒子を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整	住居中央の覆土中(床上6cm)	胴部下半破片
第12図2 図版8-1-2	甕	厚0.8	「ハ」字状の脚台部／裾端部は平坦／外面は一部黒く煤けている	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子を含む	内面：ヘラナデ後ヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	住居北壁際の覆土中(床上4cm)	脚台部裾端部小破片

第４表　635号住居跡出土土器一覧

636号住居跡

遺　　構（第13図）

［位　　置］１区。

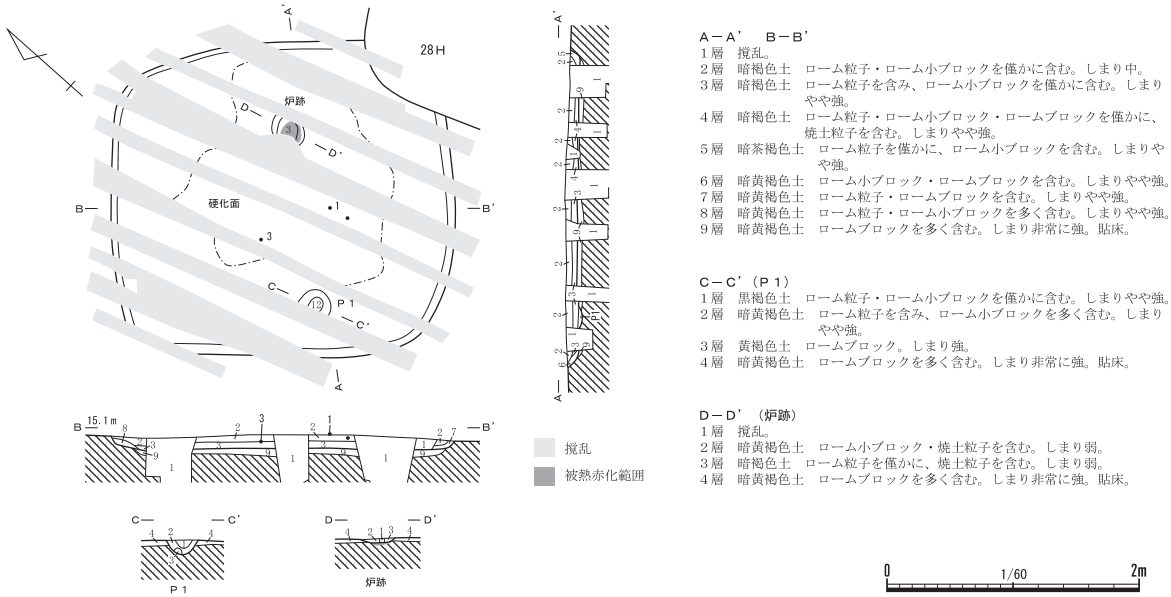
［検出状況］住居東コーナーを28Ｈに切られる。全体的に耕作による撹乱を受けている。

［構　　造］**平面形**：隅丸方形。**規模**：長軸2.73ｍ／短軸2.51ｍ／遺構確認面からの深さ６～10㎝。**壁**：緩やかに立ち上がる。**主軸方位**：Ｎ―49°―Ｅ。**壁溝**：なし。**床面**：住居中央から北東にかけて硬化した面を確認できた。**炉**：地床炉で、住居中央から北東壁に寄って位置する。長軸30㎝・短軸不明・掘り込みの深さは３㎝程、厚さ２㎝程に被熱赤化していた。**貯蔵穴**：検出されなかった。**柱穴**：主柱穴は検出されなかった。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：Ｐ１が入口梯子穴と考えられる。住居南西中央壁際で検出された。一部耕作の撹乱を受けている。直径26㎝の円形と思われ、深さ12㎝。**掘り方**：住居ほぼ全体に６㎝程の深さの掘り込みが確認できた。

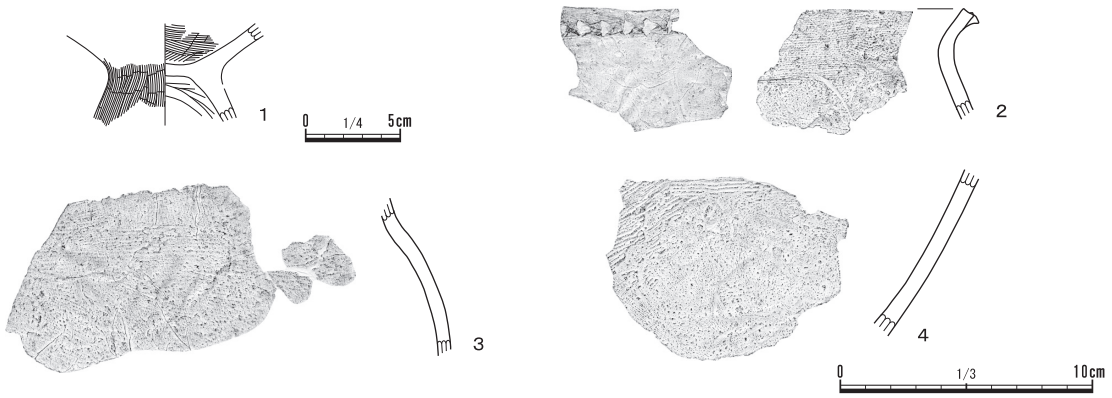
［覆　　土］８層（２～９層）に分層される。暗褐色土（２・３層）を主体とし、堆積状況から自然堆積と考えられる。

［遺　　物］甕形土器の破片が出土した。覆土中からの出土である。

［時　　期］弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。



第13図　636号住居跡（1／60）



第14図　636号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

挿図番号 図版番号	器種	法量 (cm)	特　　徴	色　調	胎　土	調整等	出土位置	遺存度
第14図1 図版8-2-1	甕	高 [5.4]	「ハ」字状の脚台部／全体的に黒く煤けている	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：胴部下半はハケ目調整、脚台部はヘラナデ／外面：ハケ目調整	住居中央からやや南寄りの覆土中（床上10cm）	胴部下半～脚台部50％
第14図2 図版8-2-2	甕	高 [4.2]	頸部はくびれ、口縁部は外反／口唇部は平坦に面取りされ、外面は刻み目がまわる／外面は一部黒く煤けている	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子を含む	内面：口頸部はハケ目調整、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整か	覆土中	口縁部～胴部上半破片
第14図3 図版8-2-3	甕	厚 0.5	頸部はくびれ、胴部は球状を呈する／外面は一部黒く煤けている	淡茶褐色を基調	黄褐色粒子を含む	内面：頸部はハケ目調整、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整	住居中央からやや西寄りの覆土中（床上4cm）	頸部～胴部上半破片
第14図4 図版8-2-4	甕	厚 0.7	胴部下半から中位にかけて開く／頸部はくびれ、胴部は球状を呈する／外面は一部黒く煤けている	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面：細かいハケ目調整／外面：下半は細かいハケ目調整、上半は粗いハケ目調整	覆土中	胴部下半破片

第５表　636号住居跡出土土器一覧

遺　　物（第14図、図版８－２、第５表）

１～４は甕形土器である。

637号住居跡

遺　　構（第15図）

［位　　置］２区。

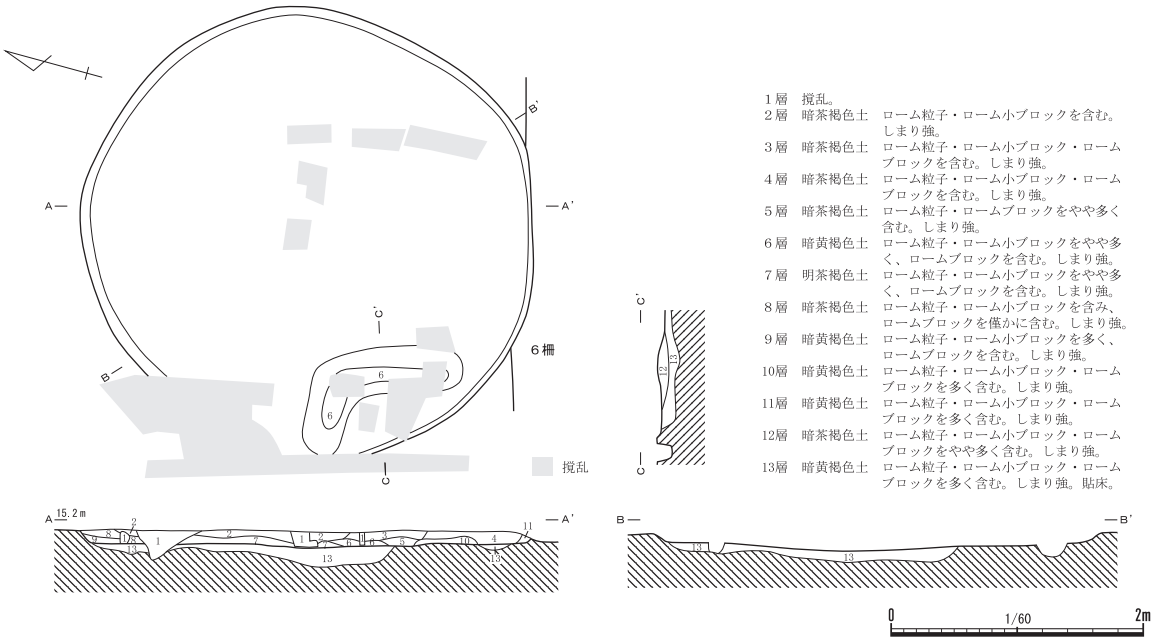
［検出状況］住居南側一部を６柵に切られる。耕作による撹乱を受けている。遺存状態は悪い。

［構　　造］**平面形**：不整の円形か。**規模**：径3.62ｍ／遺構確認面からの深さ４～12cm。**壁**：緩やかに立ち上がる。**主軸方位**：不明。**壁溝**：なし。**床面**：硬化した面は確認されず、全体的に軟弱である。**炉**：検出されなかった。**貯蔵穴**：検出されなかった。**柱穴**：主柱穴は検出されなかった。**赤色砂利層**：確認できなかった。**入口施設**：検出されなかった。**掘り方**：一部南壁付近を除き、全体的に３cm～15cmの深さの掘り込みが確認できた。

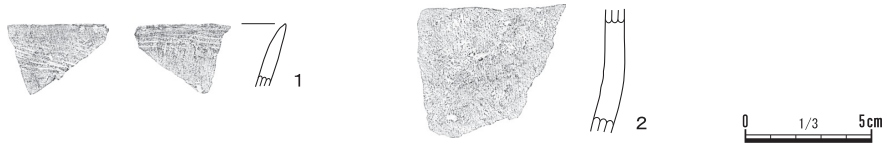
［覆　　土］12層（２～13層）に分層される。暗茶褐色土を主体とし、全体的にしまりが強い。

［遺　　物］坩・壷形土器が僅かに出土した。覆土からの出土である。

［時　　期］弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。



第15図　637号住居跡（1／60）



第16図　637号住居跡出土遺物（1／3）

挿図番号 図版番号	器種	法量 (cm)	特　　徴	色　調	胎　土	調整等	出土位置	遺存度
第16図1 図版8-3-1	坩	厚0.5	口縁部は外傾気味で、口唇部はやや細く尖る	黄褐色を基調	砂粒を僅かに含む	内外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	覆土中	口縁部小破片
第16図2 図版8-3-2	壷	厚0.7	外面に赤彩	胎土は黄褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く、砂粒を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ磨き調整	覆土中	胴部破片

第６表　637号住居跡出土土器一覧

遺　　物（第16図、図版８－３、第６表）

１は坩形土器、２は壷形土器である。

（３）溝跡

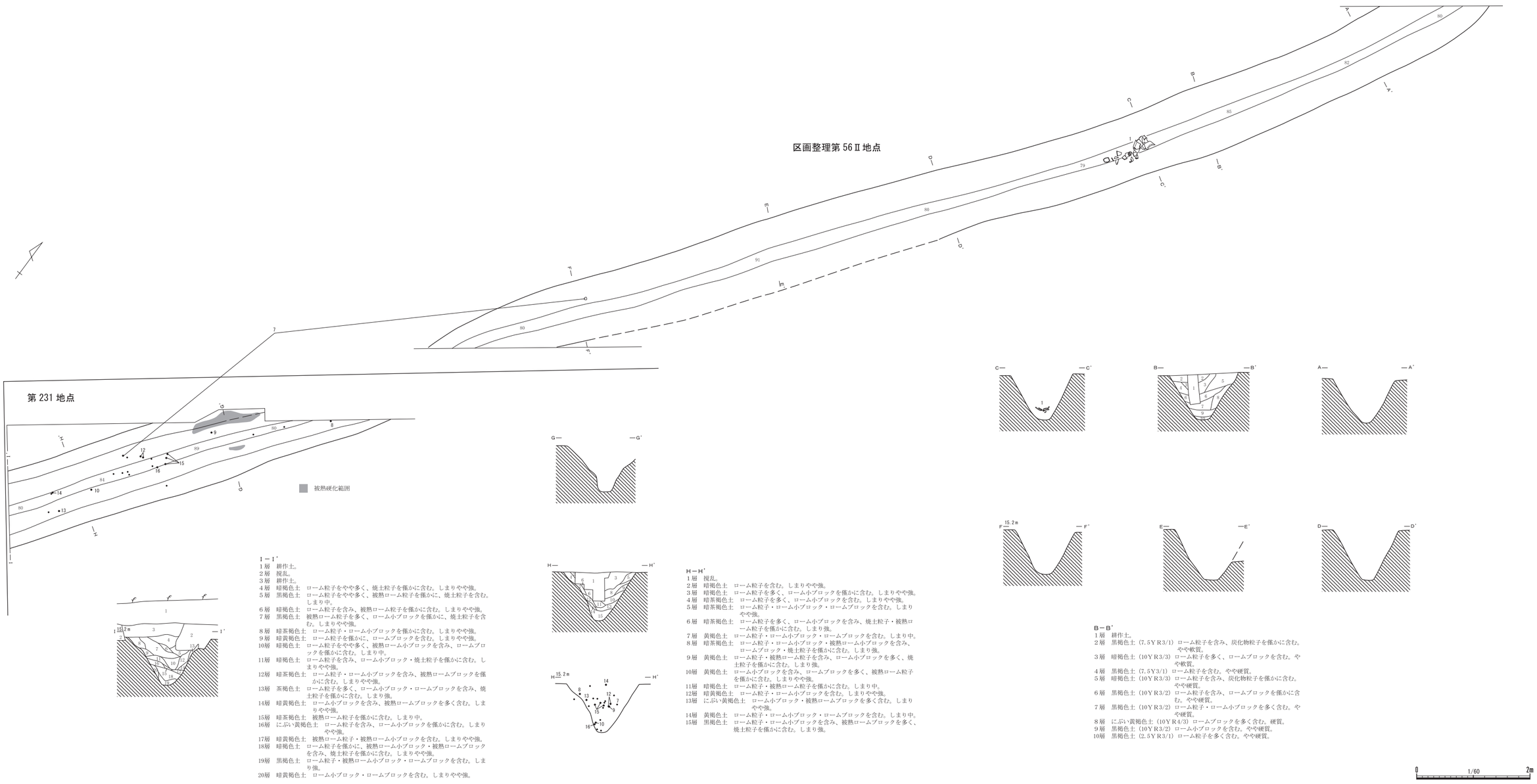
44号溝跡

遺　　構（第17図）

［位　　置］１区。

［検出状況］区画整理第56Ⅱ地点で425Yを切る。耕作による撹乱を受けている。

［構　　造］**規模**：検出長7.06ｍ、全長27.84ｍ／上幅130～135㎝。区画整理第56Ⅱ地点側では上幅110～120㎝／下幅10～13㎝。区画整理第56Ⅱ地点側では下幅13～25㎝／遺構確認面からの深さ80～89㎝。**断面形**：Ｖ字形。セクションＧ－Ｇ’付近では北側壁で溝底から40㎝程、南側壁で溝底から30㎝程の箇所で稜が明瞭である。**壁**：55～64°で立ち上がる。**走向方位**：本調査地点では、Ｎ―



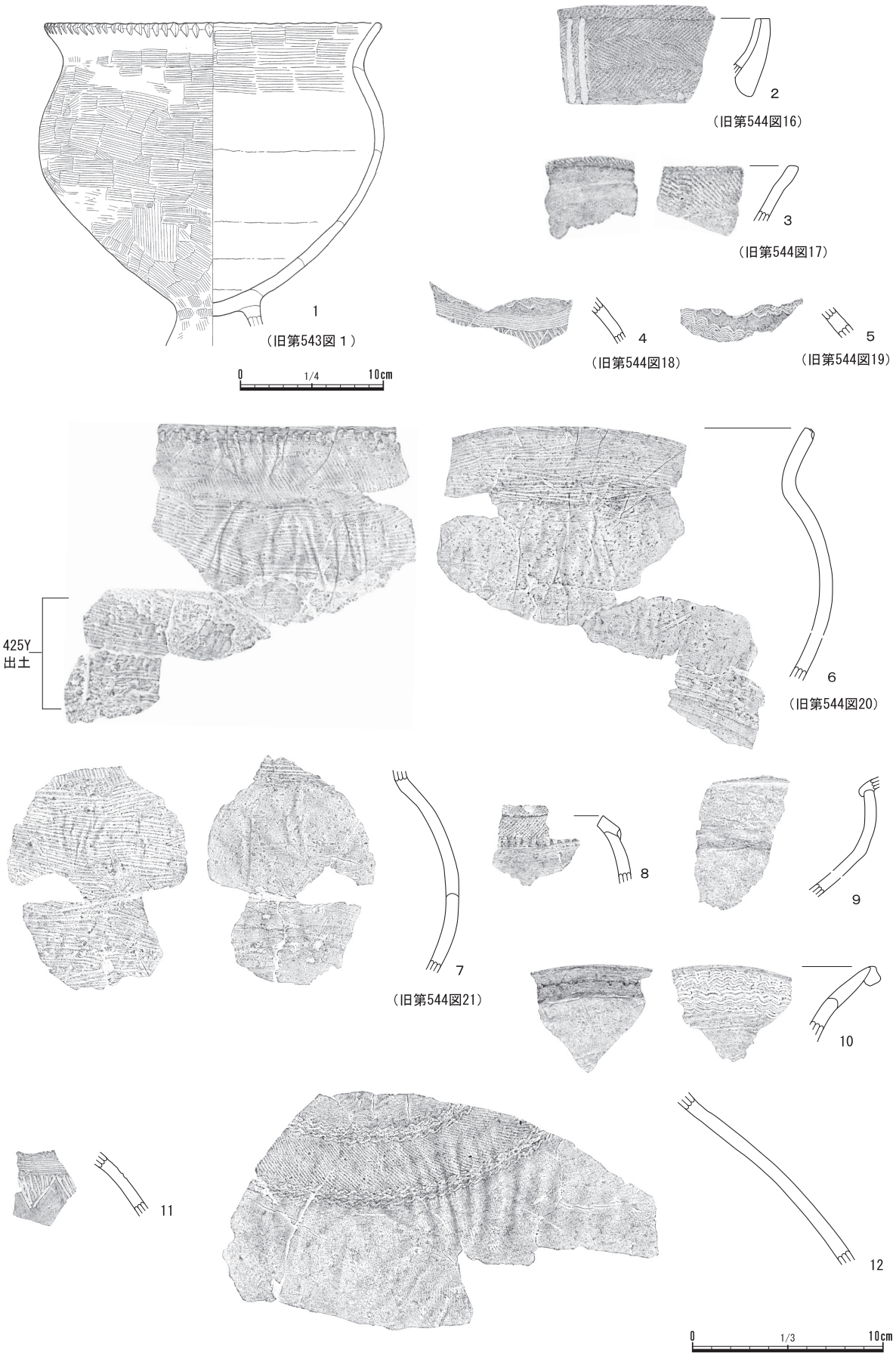
1－1'
1 層　耕作土。
2 層　撹乱。
3 層　耕作土。
4 層　暗褐色土　ローム粒子をやや多く、焼土粒子を僅かに含む。しまりやや強。
5 層　黒褐色土　ローム粒子をやや多く、被熱ローム粒子を僅かに、焼土粒子を含む。しまり中。
6 層　暗褐色土　ローム粒子を含み、被熱ローム粒子を僅かに含む。しまりやや強。
7 層　黒褐色土　被熱ローム粒子を多く、ローム小ブロックを僅かに、焼土粒子を含む。しまりやや強。
8 層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。しまりやや強。
9 層　暗黄褐色土　ローム粒子を僅かに、ロームブロックを含む。しまりやや強。
10層　暗褐色土　ローム粒子をやや多く、被熱ローム小ブロックを含み、ロームブロックを僅かに含む。しまり中。
11層　暗褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。しまりやや強。
12層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含み、被熱ロームブロックを僅かに含む。しまりやや強。
13層　茶褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロック・ロームブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
14層　暗黄褐色土　ローム小ブロックを含み、被熱ロームブロックを多く含む。しまりやや強。
15層　暗茶褐色土　被熱ローム粒子を僅かに含む。しまり中。
16層　にぶい黄褐色土　ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む。しまりやや強。
17層　暗黄褐色土　被熱ローム粒子・被熱ローム小ブロックを含む。しまりやや強。
18層　暗褐色土　ローム粒子を僅かに、被熱ローム小ブロック・被熱ロームブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む。しまりやや強。
19層　黒褐色土　ローム粒子・被熱ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり強。
20層　暗黄褐色土　ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまりやや強。

H－H'
1 層　撹乱。
2 層　暗褐色土　ローム粒子を含む。しまりやや強。
3 層　暗褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロックを僅かに含む。しまりやや強。
4 層　暗茶褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含む。しまりやや強。
5 層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまりやや強。
6 層　暗茶褐色土　ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含み、焼土粒子・被熱ローム粒子を僅かに含む。しまり強。
7 層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり中。
8 層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・被熱ローム小ブロックを含み、ロームブロック・焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
9 層　黄褐色土　ローム粒子・被熱ローム粒子を含み、ローム小ブロックを多く、焼土粒子を僅かに含む。しまり強。
10層　黄褐色土　ローム小ブロックを含み、ロームブロックを多く、被熱ローム粒子を僅かに含む。しまりやや強。
11層　暗褐色土　ローム粒子・被熱ローム粒子を僅かに含む。しまり中。
12層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまりやや強。
13層　にぶい黄褐色土　ローム小ブロック・被熱ロームブロックを多く含む。しまりやや強。
14層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む。しまり中。
15層　黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含み、被熱ロームブロックを多く、焼土粒子を僅かに含む。しまり強。

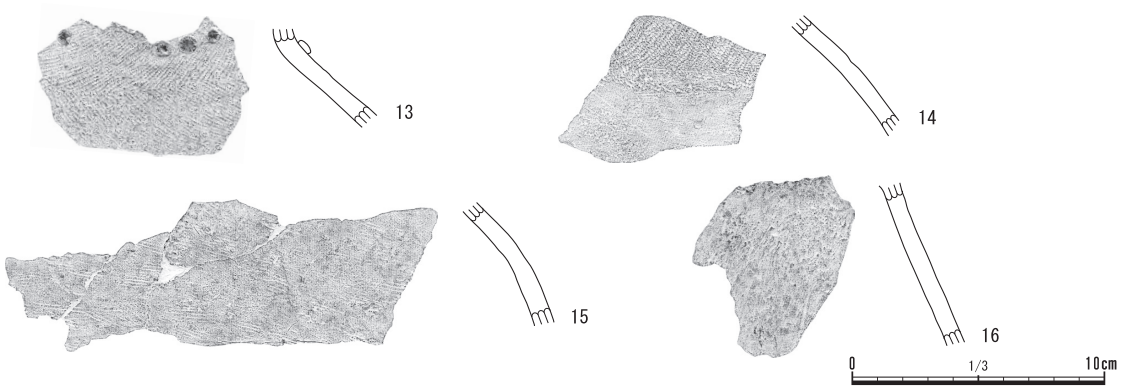
B－B'
1 層　耕作土。
2 層　黒褐色土（7.5Y R3/1）ローム粒子を含み、炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
3 層　暗褐色土（10Y R3/3）ローム粒子を多く、ロームブロックを含む。やや軟質。
4 層　黒褐色土（7.5Y3/1）ローム粒子を含む。やや硬質。
5 層　暗褐色土（10Y R3/3）ローム粒子を含み、炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
6 層　黒褐色土（10Y R3/2）ローム粒子を含み、ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
7 層　黒褐色土（10Y R3/2）ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
8 層　にぶい黄褐色土（10Y R4/3）ロームブロックを多く含む。硬質。
9 層　黒褐色土（10Y R3/2）ローム小ブロックを含む。やや硬質。
10層　黒褐色土（2.5Y R3/1）ローム粒子を多く含む。やや硬質。

0　1/60　2m

第17図　44号溝跡（1／60）



第18図　44号溝跡出土遺物１（１／４・１／３）



第19図　44号溝跡出土遺物２（1／3）

35°―Ｅ。区画整理第56Ⅱ地点では、Ｎ―50°―Ｅ。**その他**：セクションＧ－Ｇ’付近の両壁で被熱硬化面が確認された。被熱硬化面は北側壁では溝底から上に30～53㎝で幅123㎝の範囲、南側壁では溝底から上に30㎝前後の位置で幅28㎝の範囲で検出された。特に北側壁に広く認められる。

［覆　　土］セクションＨ－Ｈ’で14層（２～15層）、セクションＩ－Ｉ’で17層（４～20層）に分層される。覆土の堆積状況から自然堆積と考えられる。覆土中に被熱したローム粒子・ロームブロックが含まれており、特にセクションＨ－Ｈ’の下層（13・15層）に被熱ロームブロックが多く認められた。

［遺　　物］覆土中から鉢・高坏・壷・甕形土器が出土した。覆土中層からの出土が多い。また、６の土器は425Ｙ出土の土器と接合した資料である。７は区画整理第56Ⅱ地点で出土した破片と本調査地点で出土した破片が接合した資料である。

［時　　期］弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

［所　　見］本遺構は、Ｖ字形を基本とする断面形と出土遺物及び過去の周辺の調査成果から環濠の一部と考えられる。

遺　　物（第18・19図、図版８－４、図版９－１、第７表）

１～７は既報告資料（佐々木・内野・宮川　2009）であり、今回の調査で出土した遺物は８～16である。１・６・７・16は甕形土器、２～５・９・11～15は壷形土器、８は高坏形土器、10は鉢形土器である。

挿図番号 図版番号	器種	法量 (㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調整等	出土位置	遺存度
第18図1 図版8-4-1 （旧第543図1）	甕	高 [22.3] 口 13.7	台付甕／頸部はくびれ、口縁部は外傾する／口唇部外面はハケ状工具による刻み目／最大径は胴部上半にもつ／内面及び外面胴部中位以上が黒く煤けている	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面：口頸部はハケ目調整、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整	区画整理56Ⅱ地点44M（9層）	脚台部を欠損するのみ
第18図2 図版8-4-2 （旧第544図16）	壷	厚 1.5	幅広複合口縁／口唇部にRL単節斜縄文を地文に円形赤彩文がまわる／複合部は沈線による棒状文と円形赤彩文、地文は3段の単節斜縄文による羽状縄文／内面は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・橙色粒子を含む	内面：ヘラ磨き調整	区画整理56Ⅱ地点44M覆土中	口縁部破片

第７表　44号溝跡出土土器一覧（１）

挿図番号 図版番号	器種	法量 (㎝)	特　　徴	色　調	胎　土	調整等	出土位置	遺存度
第18図3 図版8-4-3 (旧第544図17)	壷	厚 0.6	単純口縁／口唇部にRL単節斜縄文／内面に無節R斜縄文／内外面に赤彩	胎土は黄白色を基調	砂粒・小石をやや多く含む	内面：文様部以下はヘラ磨き調整／外面：ヘラ磨き調整	区画整理56Ⅱ地点44M覆土中	口縁部破片
第18図4 図版8-4-4 (旧第544図18)	壷	厚 0.7	胴部上半に文様帯あり／文様は上段に櫛描波状文、中段に８本一単位による平行沈線文、下段に鋸歯状文／外面に赤彩	胎土は灰褐色を基調	黄褐色粒子・橙粒子を含む	内面：ヘラナデ／外面：無文部はヘラ磨き調整	区画整理56Ⅱ地点44M覆土中	胴部上半破片
第18図5 図版8-4-5 (旧第544図19)	壷	厚 0.6	胴部上半に文様帯あり／文様は７本一単位による２段の櫛描波状文／外面無文部に赤彩	胎土は灰褐色を基調	黄褐色粒子・橙粒子・茶褐色粒子を含む	内面：ヘラナデ／外面：無文部はヘラ磨き調整	区画整理56Ⅱ地点44M覆土中	胴部上半破片
第18図6 図版8-4-6 (旧第544図20)	甕	高 [14.3]	頸部はやや「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾する／口唇部外面はハケ状工具による刻み目／最大径は胴部上半にもつ／外面は黒くに煤けている／425Ｙ出土との接合資料	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く含む	内面：口頸部はハケ目調整、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整／今回425Ｙ出土の土器と１点接合	区画整理56Ⅱ地点44M覆土中と425Ｙ覆土中(床上21～31㎝)が接合	口縁部～胴部中位20％以下
第18図7 図版8-4-7 (旧第544図21)	甕	高 [10.0]	台付甕／頸部はくびれ、胴部は球状を呈する／外面は黒く煤けている	暗黄褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く含む	内面：頸部はハケ目調整、胴部はヘラナデ／外面：ハケ目調整	区画整理56Ⅱ地点44M覆土中	頸部～胴部下半破片
第18図8 図版9-1-8	鉢	高 [3.0]	複合口縁／口縁部は内傾する／口唇部と複合部にLR単節斜縄文を施文し、複合部には円形赤彩文がまわる／複合部下端にハケ状工具による刻み目／内面及び外面複合部直下に赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子・橙粒子をやや多く含む	内面：ヘラ磨き調整／外面：複合部直下はヘラ磨き調整	覆土中(坑底上65㎝)	口縁部～胴部上半破片
第18図9 図版9-1-9	高坏	高 [6.6]	埦状の坏部で、口縁部は屈曲し外反するものか／下半部に稜をもつ／内外面は赤彩	胎土は暗茶褐色を基調	橙色粒子を僅かに含む	内外面：ていねいなヘラ磨き調整	覆土中(坑底上44㎝)	坏部破片
第18図10 図版9-1-10	壷	高 [4.2]	幅狭複合口縁／口縁部は外反する／内面に７本一単位による櫛描波状文が２段、上から下の順に施文／内外面は赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒を含む	内面：無文部はハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面：複合部は横ナデ、頸部はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	覆土中(坑底上16㎝)	口頸部破片
第18図11 図版9-1-11	壷	厚 0.6	４と同一個体と思われる文様は上段に櫛描波状文、中段に８本一単位による平行沈線文、下段に鋸歯状文／外面に赤彩	胎土は灰褐色を基調	黄褐色粒子・橙粒子を含む	内面：ヘラナデ／外面：無文部はヘラ磨き調整	覆土中	胴部上半破片
第18図12 図版9-1-12	壷	厚 0.7	胴部文様帯は１段／２段のRL単節斜縄文を施文し、その上下を３段の自縄結節文で区画する／文様帯以外に赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄白色粒子を多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	覆土中(坑底上47・52㎝)	胴部上半～中位の大型破片
第19図13 図版9-1-13	壷	厚 0.6	胴部から頸部にかけて外反する／文様は単節斜縄文を上下羽状に施文し、頸部に円形貼付文を付す／内面頸部に赤彩	暗赤褐色を基調	黄褐色粒子を多く、角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ後ヘラ磨き調整	覆土中(坑底上56㎝)	頸部～胴部上半破片
第19図14 図版9-1-14	壷	厚 0.6	胴部端末結節を伴うにLR単節斜縄文が施文される／外面文様部以下に赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒を含み、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：無文部はハケ目調整後ヘラ磨き調整	覆土中(坑底上83㎝)	胴部上半破片
第19図15 図版9-1-15	壷	厚 0.8	球状の胴部／外面に赤彩	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く含む	内面：ヘラナデ／外面：無文部はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	覆土中(坑底上48～53㎝)	胴部上半～中位破片
第19図16 図版9-1-16	甕	高 [6.3]	「ハ」字状の脚台部／内外面は黒く煤けている	胎土は暗黄褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く含む	内外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	覆土中(坑底上15㎝)	脚台部破片

第７表　44号溝跡出土土器一覧（２）

第３節　古墳時代後期～平安時代の遺構

（1）概　要

今回の調査では、古墳時代後期～平安時代の遺構は、住居跡１軒（28Ｈ）が検出された。なお、28Ｈについては、すでに区画整理第28Ⅲ地点（佐々木・内野・宮川　2009）の際に調査が行われ、報告済であったが、その際に弥生時代後期～古墳時代前期に比定されていた住居跡（178Ｙ）である。今回の調査により、新たにカマド部分が検出されたことにより、訂正を行い、遺構名も変更することとした。

（2）住居跡

28号住居跡

遺　　構（第20図）

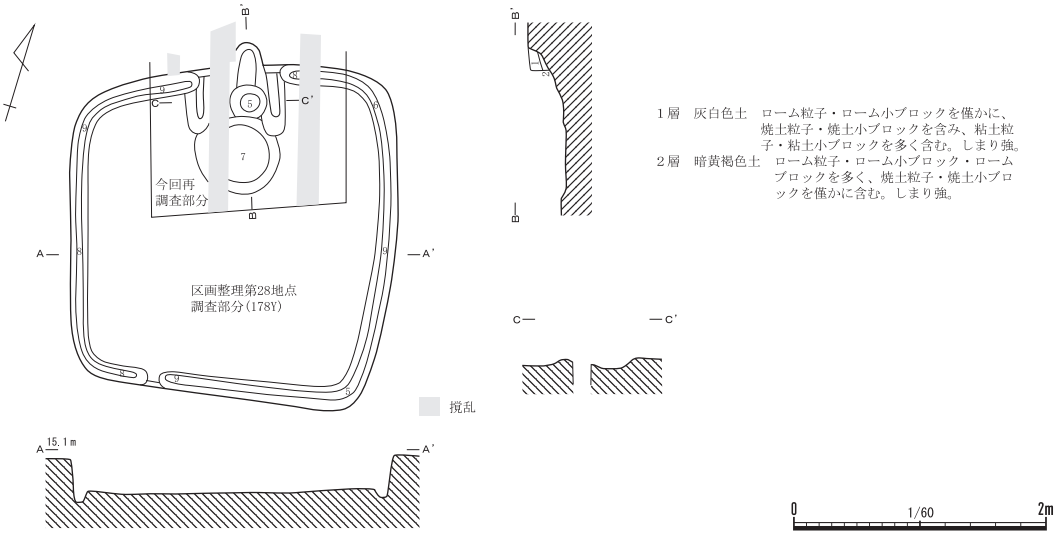
［位　　置］１区。

［検出状況］636Ｙを切る。

［構　　造］**平面形**：正方形。**規模**：長軸2.70ｍ／短軸2.60ｍ／遺構確認面からの深さ22～27㎝。**壁**：約80°の角度で立ち上がる。**主軸方位**：Ｎ―15°―Ｗ。**壁溝**：確認できなかった。**壁溝**：カマド部分を除き全周する。上幅７～16㎝・下幅５～７㎝前後・深さ６～９㎝。**床面**：カマド前面に僅かに硬化面を確認できた。**カマド**：今回の調査により、北壁中央から検出された。長さ120㎝・幅79㎝・壁への掘り込みは18㎝。主軸方位は住居跡と同じＮ―15°―Ｗ。**柱穴**：検出されなかった。**掘り方**：確認できなかった。

［覆　　土］耕作による撹乱が著しく詳細は不明であるが、ローム粒子を僅かに、炭化物粒子を多く含む黒褐色土が確認できた。また、北壁際には焼土の堆積がめだつ（佐々木・内野・宮川　2009）。

［遺　　物］出土しなかった。



第20図　28号住居跡（1／60）

［時　　期］古墳時代後期～平安時代。
［所　　見］ここでは、新たにカマドが検出されたため、時期の再設定を行うつもりで調査済資料もすべて調べたが、出土遺物がなかったため、古墳時代後期～平安時代と扱うこととする。

第４節　中世の遺構・遺物

（1）概　要

今回の調査では、中世の遺構は柵列状遺構２条（５・６柵）が検出された。当初は、溝跡２本とピット29本（１～24・26～30Ｐ）は別々のものと捉え、溝跡については、畑の畝と考えていたが、ピットがこの溝跡に沿ってのみ確認できることから、これらの溝跡とピットについては同一遺構とみなし、ここでは、柵列状遺構と扱うこととした。

（2）柵列状遺構

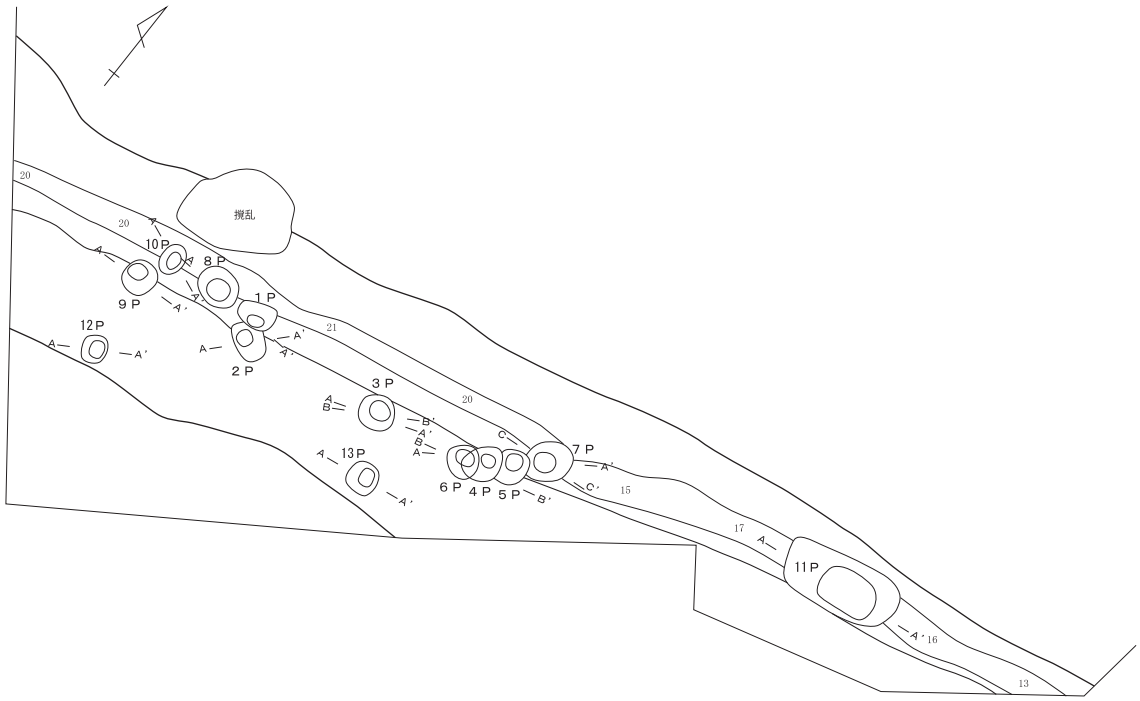
柵列状遺構は、１区から検出された５号柵列状遺構（５柵）と２区から検出された６号柵列状遺構（６柵）の２列である。基本的な構造としては、東西方向に延びる溝跡にピットが付随して配置されている。５柵と６柵はほぼ平行に走向していることから、同一遺構と考えられる。出土遺物は、６柵の覆土中と22Ｐから陶器１点ずつが出土した。それぞれの陶器の時期が16世紀後半であることから、５・６号柵列状遺構は中世の所産のものと考えられる。

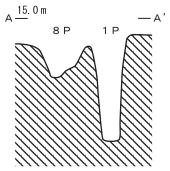
５号柵列状遺構

遺　　構（第21図、第８表）
［位　　置］１区。
［検出状況］635Yを切る。西側一部を撹乱される。
［構　　造］**規模**：検出長9.95ｍ／上幅152～170㎝／下幅15～30㎝／遺構確認面からの深さ13～21㎝。**壁**：北側壁はなだらかに立ち上がり、南側壁は中端で稜を有する。**走向方位**：Ｎ―80°―Ｅ。**ピット**：13本（１～13Ｐ）のピットが配置している。ピットの特徴については第８表を参照。
［覆　　土］ロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。
［遺　　物］出土しなかった。
［時　　期］６柵と同時期の中世（16世紀後半）と思われる。

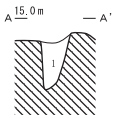
６号柵列状遺構

遺　　構（第22図、第８表）
［位　　置］２区。
［検出状況］637Yを切る。
［構　　造］**規模**：検出長22.20ｍ／上幅58～108㎝／下幅23～46㎝／遺構確認面からの深さ６～14㎝。**壁**：皿状に緩やかに立ち上がる。**走向方位**：部分的に蛇行する箇所もあるが、Ｎ―80°―Ｅ。**ピット**：16本（14～24・26～30Ｐ）のピットが配置している。ピットの特徴については第８表を参



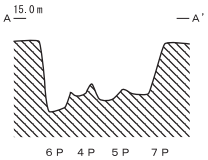


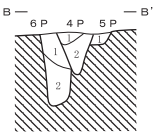
１・８号ピット

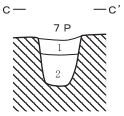


１層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。しまり中。

２号ピット







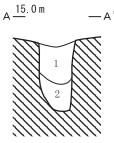
４～７号ピット

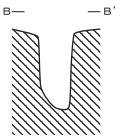
４Ｐ
１層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。しまり中。
２層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。しまり中。

５Ｐ
１層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり中。

６Ｐ
１層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む。しまり中。
２層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり中。

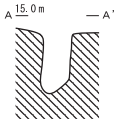
７Ｐ
１層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。しまり中。
２層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。しまり強。



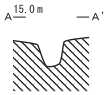


１層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む。しまり弱。
２層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む。しまり中。

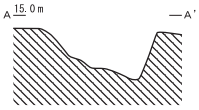
３号ピット



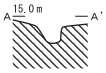
９号ピット



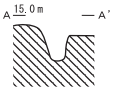
10号ピット



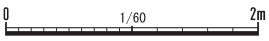
11号ピット



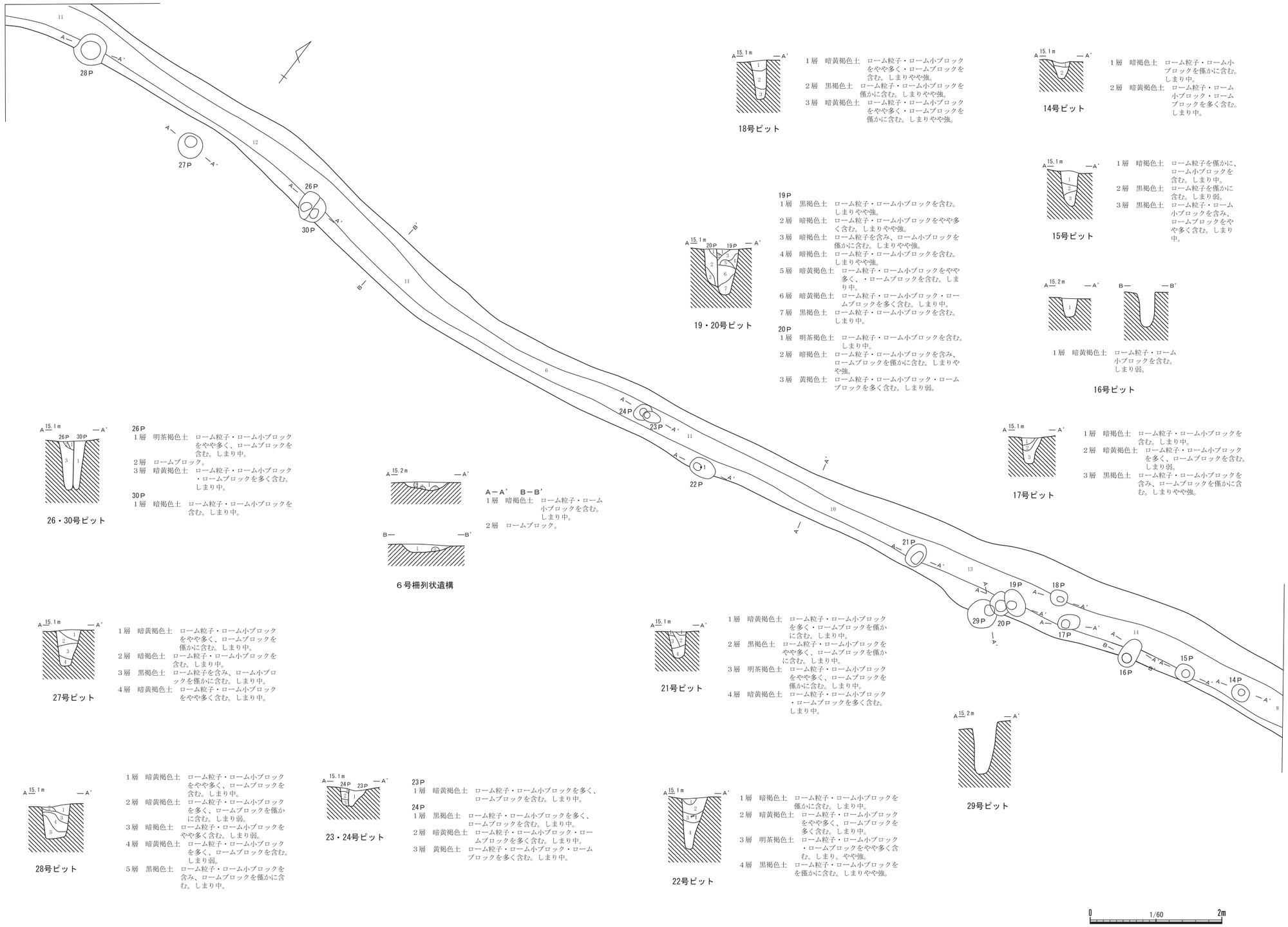
12号ピット



13号ピット



第21図　５号柵列状遺構（1／60）

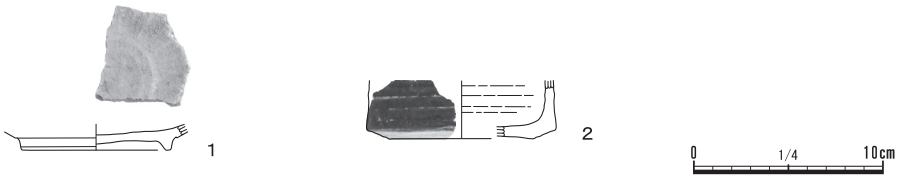


第22図　６号柵列状遺構（1／60）

遺構名	位置	平面形	規模(cm)			覆土及び特徴等	主な遺物	時期
			長軸	短軸	深さ			
1 P	1区(5柵)	隅丸長方形	30	20	95	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗褐色土／２Ｐを切る	なし	中世以降
2 P		隅丸長方形	34	25	60	単層／１Ｐに切られる	なし	中世以降
3 P		隅丸方形	29	27	75	２層	なし	中世以降
4 P		隅丸方形	23	17	57	２層／５・６Ｐを切る	なし	中世以降
5 P		隅丸方形	30	25	64	単層／４Ｐに切られ、７Ｐを切る	なし	中世以降
6 P		隅丸方形	27	25	72	２層／４Ｐに切られる	なし	中世以降
7 P		隅丸方形	40	32	59	２層／５Ｐに切られる	なし	中世以降
8 P		隅丸長方形	35	29	45	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む暗褐色土	なし	中世以降
9 P		隅丸方形	28	26	61	単層：ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土	なし	中世以降
10 P		隅丸長方形	25	18	39	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む黒褐色土	なし	中世以降
11 P		隅丸長方形	96	46	59	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土	なし	中世以降
12 P		隅丸方形	22	20	20	単層：ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土	なし	中世以降
13 P		隅丸方形	25	24	35	単層：ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む暗褐色土	なし	中世以降
14 P	2区(6柵)	隅丸方形	28	25	34	２層	なし	中世以降
15 P		隅丸方形	28	26	56	３層	なし	中世以降
16 P		隅丸長方形	45	27	50	単層	なし	中世以降
17 P		隅丸長方形	34	23	53	３層	なし	中世以降
18 P		隅丸方形	26	24	68	３層	なし	中世以降
19 P		隅丸長方形	43	29	83	７層／20 Ｐを切る	なし	中世以降
20 P		隅丸方形	36	(23)	70	３層／19 Ｐに切られ、29 Ｐを切る	なし	中世以降
21 P		隅丸長方形	36	26	50	４層	なし	中世以降
22 P		隅丸長方形	40	26	80	４層	陶器１点（皿）	中　世 (16c後半)
23 P		隅丸長方形	26	15	37	単層／24 Ｐを切る	なし	中世以降
24 P		隅丸長方形	28	23	25	３層／23 Ｐに切られる	なし	中世以降
26 P		隅丸長方形	43	23	92	３層／30 Ｐを切る	なし	中世以降
27 P		隅丸方形	38	36	58	４層	なし	中世以降
28 P		隅丸方形	48	43	61	５層	なし	中世以降
29 P		隅丸方形	45	43	81	単層：ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土／20 Ｐに切られる	なし	中世以降
30 P		隅丸長方形	40	(18)	96	単層／26 Ｐに切られる	なし	中世以降

※25 Ｐは縄文

第８表　５・６号柵列状遺構内ピット一覧



第23図　６号柵列状遺構出土遺物（1／4）

挿図番号 図版番号	種別	器 種	法量 (cm)	製 作 の 特 徴 等	出土位置	推定産地	時期
第23図1 図版9-2-1	陶器	皿	高 [1.4] 底 (8.0)	菊皿／底部破片／高台／内面に灰釉／胎土の色調は黄白色／胎土に砂粒を僅かに含む／遺存度は底部40％	６柵 (22 Ｐ)	瀬戸・美濃系	中　世 (16c後半)
第23図2 図版9-2-2	陶器	香炉	高 [3.2] 底 (11.0)	ロクロ成形／外面に鉄釉／胎土の色調は灰白色／胎土は精錬されている／遺存度は体部下半～底部20％以下	６柵	瀬戸・美濃系	中　世 (16c後半)

第９表　６号柵列状遺構出土陶器一覧

照。

［覆　　土］２層に分層される。ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。

［遺　　物］22Ｐから陶器１点（皿）と覆土中から陶器１点（香炉）の合計２点が出土した。

［時　　期］中世（16世紀後半）。

遺　　物（第23図、図版９－２、第９表）

［陶　　器］（第23図１・２、図版９―２―１・２、第９表）

１は22Ｐから出土した陶器である。底部破片で、瀬戸・美濃系の灰釉皿である。

２は瀬戸・美濃系の陶器で香炉である。

第５節　遺構外出土遺物

ここでは、表土や撹乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の遺物、弥生時代後期～古墳時代前期の土器、中世以降の陶磁器・土器に分類する。

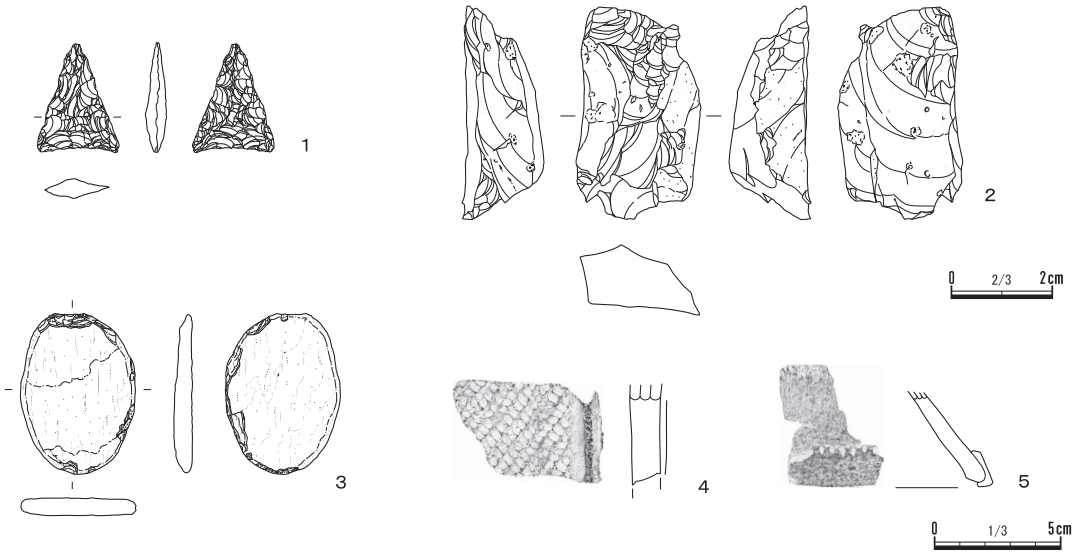
（１）縄文時代の遺物（第24図１～４、図版９－３－１～４、第10・11表）

［石　　器］（第24図１～３、図版９－３－１～３、第10表）

１は石鏃で、石材はチャートである。２は黒曜石製の剥片である。３は石錘で、石材は片岩である。

［土　　器］（第24図４、図版９－３－４、第11表）

４は縄文時代中期の加曽利Ｅ１式土器である。



第24図　遺構外出土遺物（2／3・1／3）

挿図番号 図版番号	器　種	石　材	長さ	幅	厚さ	重量	特　　徴	出土位置
第24図1 図版9-3-1	石　鏃	チャート	21.4	16.1	4.2	0.9	完形／凹基無茎鏃／基部は浅い弧状の抉り／直線状の側縁	637 Y
第24図2 図版9-3-2	剥　片	黒曜石	41.8	24.4	16.2	13.4	左半を欠損／打面を欠損／背面に原礫面あり	425 Y
第24図3 図版9-3-3	石　錘	片　岩	63.4	45.4	7.4	36.0	完形／周縁に剥離面／上下両端に非常に浅い抉りあり	表採

（単位：mm，g）

第10表　遺構外出土石器一覧

挿図番号 図版番号	器種 種別	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎　土	時　期 型　式	出土遺構 出土位置
第24図4 図版9-3-4	深鉢	胴	厚 1.3	僅かに外傾する	隆帯による懸垂文／地文はRL単節斜縄文／色調は淡橙色	石英・角閃石・砂粒を含む	縄文中期後葉 (加曽利E1式)	44 M
第24図5 図版9-3-5	高坏	脚	厚 0.7	裾部は複合状／複合部上端に刻み	胎土の色調は淡茶褐色を基調／外面は赤彩／内面：ナデ／外面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整	黄褐色粒子・橙色粒子・砂粒を含む	弥生後期後葉～古墳初頭	5 柵

第11表　遺構外出土土器一覧

図版番号	種別	器種	法量 (cm)	製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
図版9-3-6	磁器	碗	高 [2.5]	染付／高台／内面：二重圏線、見込みあり／外面：網目文、高台に二重圏線／体部～底部小破片	肥前系	425 Y	近　世 (18c後半)
図版9-3-7	陶器	皿	高 [2.8]	志野釉／胎土の色調は暗黄褐色を基調／胎土は精錬されている／口縁部～体部小破片	瀬戸・美濃系	425 Y	中　世 (15c)
図版9-3-8	陶器	皿	高 [1.1]	灯明具／胎土の色調は灰色／胎土に黒色粒子を含む／体部～底部小破片	不　明	遺構外 (1区)	不　明
図版9-3-9	陶器	徳利	厚 0.4	外面に鉄釉／胎土の色調は淡灰色／胎土は精錬されている／体部小破片	瀬戸・美濃系	遺構外 (1区)	近　世 (19c)
図版9-3-10	陶器	甕	厚 1.0	内面に自然釉／胎土の色調は淡茶褐色／胎土に白色砂粒を含む／胴部破片	常　滑	確認調査 11 Tr	中　世 (15c)
図版9-3-11	土器	擂鉢	厚 1.0	内面に櫛目10本確認／色調は明橙色／胎土に白色砂粒を含む／底部付近破片	瀬戸・美濃系	遺構外 (1区)	近　世 (18c代)
図版9-3-12	土器	焙烙	厚 1.1	平底／色調は淡茶褐色を基調／胎土に金雲母・茶褐色粒子・白色砂粒を含む／底部破片	在地系	遺構外 (1区)	中　世 (16c前)

第12表　遺構外出土陶磁器・土器一覧

（２）弥生時代後期～古墳時代前期の土器（第24図５、図版９－３－５、第11表）

５は高坏形土器の脚台部破片である。

（３）中世以降の陶磁器・土器（図版９－３－６～12、第12表）

６は磁器碗である。７～10は陶器で、７・８は皿、９は徳利、10は甕である。11・12は土器で、11は擂鉢、12は焙烙である。

第４章　調査のまとめ

第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の調査成果

（１）44号溝跡について

本地点における弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、住居跡４軒（425・635～637Ｙ）、溝跡１本（44Ｍ）であった。特に、44Mは区画整理第56Ⅱ地点で調査されており（佐々木・内野・宮川 2009）、断面形がＶ字形を呈する溝跡である。今回の調査成果と合わせて、44Mについて簡単にまとめる。

44号溝跡（佐々木・内野・宮川　2009、本報告）

断面形：Ｖ字形。**上幅**：110～135㎝。**下幅**：10～25㎝。**壁**：55～64°で立ち上がる。**遺構確認面からの深さ**：80～89㎝。**溝底標高**：14.23～14.33ｍ。**出土遺物**：鉢・高坏・壷・甕形土器が出土した。**時期**：良好な資料の出土がなく、位置付けが難しい。今回報告で、東京湾沿岸系の鉢（第18図８）・高坏（第18図９）形土器の破片がわずかに出土しており、坩・器台などの小型品が出土していないことを考慮すると、現時点では弥生時代後期末葉～古墳時代初頭に位置付けられよう。

（２）西原大塚遺跡における弥生時代後期～古墳時代前期の環濠について

西原大塚遺跡では、44Ｍの他に、弥生時代後期～古墳時代前期に位置付けられ、断面Ｖ字形を呈する溝跡が検出されている。区画整理第56Ⅰ地点、第138地点で調査された40M（佐々木・内野・宮川 2009、尾形・深井・青木　2008）と、区画整理第49Ⅱ地点で検出された29M（佐々木・内野・宮川　2009）である（第25図）。29Ｍは正式な報告はないが、発掘調査時の所見で弥生時代後期～古墳時代前期の溝跡とされている。

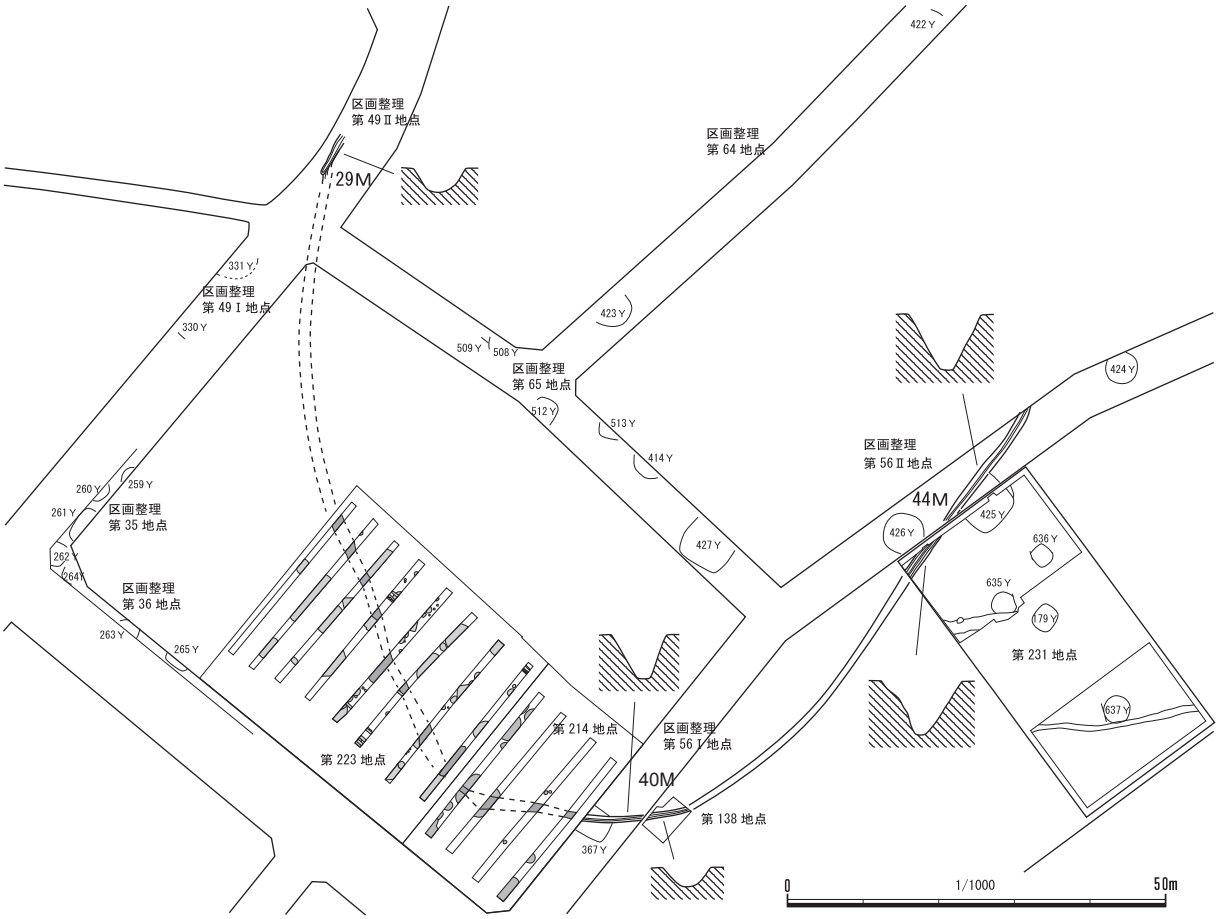
40号溝跡（佐々木・内野・宮川　2009、尾形・深井・青木　2008）

断面形：区画整理第56Ⅰ地点側ではＶ字形。第138地点ではやや逆台形を呈するが、基本的にＶ字形。**上幅**：58～100㎝。**下幅**：16～30㎝。**壁**：区画整理第56Ⅰ地点側で60～70°、第138地点側で47～55°で立ち上がる。**遺構確認面からの深さ**：区画整理第56Ⅰ地点側で57～69㎝、第138地点側で25～41㎝。**溝底標高**：区画整理第56Ⅰ地点側で14.62～14.67ｍ、第138地点側で14.78～14.85ｍ。**出土遺物**：壷・甕形土器。**時期**：弥生時代後期末葉～古墳時代前期。**所見**：溝跡の構造、Ｖ字状の断面形から、環濠の可能性が指摘される（尾形・深井・青木　2008）。

29号溝跡（佐々木・内野・宮川　2009）（註１）

断面形：やや逆台形を呈するが、基本的にＶ字形。**上幅**：77～85㎝。**下幅**：14～32㎝。**壁**：55～60°で立ち上がる。**遺構確認面からの深さ**：40～49㎝。**溝底標高**：14.88～14.94ｍ。**出土遺物**：高坏・壷形土器の破片が出土。**時期**：弥生時代後期～古墳時代前期。

これらの溝跡の関係性について、まず、44Ｍと40Ｍは上記で確認したとおり、Ｖ字状の断面形や規模といった遺構の構造が類似する。第25図に示すとおり、44Ｍが40Ｍの方向へ延びていき、スムーズにつながるとことから、同一遺構と考えられる。次に、40Ｍ西側の続きであるが、西原大塚遺跡第



第25図　44号溝跡と周辺の遺構（1／1,000）

214地点・223地点（註２）の確認調査において、溝跡が検出されている。検出位置を合わせると40Mとつながることから（第25図）、この溝跡は40Mの続きと考えられる。ここでは、第214・223地点で確認された溝跡を「仮40M」とする。この仮40Mは、北方向へ延びていき、その先には29Mが存在している。29Mの断面形はやや逆台形を呈するが、第138地点で検出された40Mの断面形と類似する。29Mの溝底の標高も、第138地点の40Ｍとほぼ同じである。29Mは、溝跡の方向性、仮40Ｍとのつながり、断面形の類似性から、40Ｍと同一遺構と想定できる。

以上の検討から29・40・44Mを同一遺構と捉え、推定線で結ぶと、これらの溝跡は弧を描く半円状となる（第25図）。溝跡内側には弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡が検出されており、40Ｍが環濠である可能性が指摘されていること（尾形・深井・青木　2008）を踏まえると、29・40・44Mは弥生時代後期～古墳時代前期の環濠と位置付けられる。なお、29・44Mの北東側の続きとなる溝跡は検出されておらず、環濠北東側の実態はまだ不明である。

29・40・44Mおよび仮44Mによる環濠は、第25図の想定図より、およそ南西－北東方向に長い半円状を呈している。小出氏は、埼玉県内における弥生時代後期～古墳時代前期の環濠の形態について、Ⅰ：舌状台地の基部を中心に弧状に溝をめぐらすもの、Ⅱ：台地の一郭に円形・楕円形・方形の溝をめぐらすもの、Ⅲ：舌状台地の基部付近にほぼ直線的に溝を掘って台地を切断する「条溝」をもつもの、Ⅳ：沖積地に掘られ、溝の平面形の推定が難しいもの、に分類している（小出　2007）。本環濠は、台地縁辺部からやや奥まった位置に存在する。周辺には平坦地形が続いていることから、小出氏の分類Ⅱ

の楕円形の環濠であると推測される。類例としては、環濠の全容がほぼ把握されている、さいたま市木曽良遺跡が挙げられる（佐藤　2001、村田・劒持・書上ほか　1998）。

本環濠の規模については、北西－南東方向（短軸）の距離は29M－44M間で約95ｍである。南西－北東方向（長軸）距離は不明だが、100ｍ以上を想定できる。仮に長軸を120ｍとすると、面積は約9，000㎡と推測される。本遺跡から見て柳瀬川の対岸に位置する富士見市南通遺跡では、東西160ｍ、南北140ｍと推定される規模の環濠が検出されている（和田　1991）。また、木曽良遺跡の環濠は長軸66ｍ、短軸56ｍである（佐藤　2001）。松本氏は、弥生時代後期の環濠集落の規模について、15,000㎡を超えるものは少数で、約10,000㎡を平均として、ほとんどが10,000㎡以下の面積規模の環濠集落が多い（松本　1999）と指摘する。これらの事例などから、本環濠は弥生時代後期～古墳時代前期では平均的な規模と想定されよう。

なお、本環濠は44Ｍで425Ｙと重複し、40Ｍで367Ｙと重複している。いずれも溝跡が住居跡を壊しており、住居跡（古）→溝跡（新）の新旧関係が読み取れる。本環濠と住居跡で新旧関係が明白であることは大きな情報であり、①環濠構築以前の集落の展開の段階（425Y）、②環濠構築・使用時の段階（44M）、③環濠埋没時の段階を想定できる。ただし、44Mと425Yは出土遺物の内容から共に弥生時代後期末葉～古墳時代初頭に位置付けであり、出土遺物からでは段階的な時間差を見いだせなかった。今後、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての編年研究とともに、西原大塚遺跡内における当該期の集落変遷、さらには現在までに36基検出されている方形周溝墓（墓域）との関連性を考察していく必要がある。

［註］

註１　29Mについて記述するにあたり、原図、出土遺物を確認した。29Ｍは、近世の溝状の土坑と重複しており、大部分を破壊されている状況である。出土遺物は高坏・壷形土器の破片が出土しており、調査所見のとおり、29Ｍは弥生時代後期～古墳時代前期の溝跡として良いと考えられる。

註２　西原大塚遺跡第223地点では、令和２年４月～６月にかけて道路部分および浸透トレンチ部分の発掘調査が実施されている。その際に、この溝跡を56Mとして調査している。

［引用・参考文献］

尾形則敏・深井恵子・青木　修　2008『西原大塚遺跡第138地点　西原大塚遺跡第154地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第14集　志木市遺跡調査会

小出輝雄　2007「環濠の性格についての考察－埼玉県内の例を中心として－」『埼玉の弥生時代』 六一書房

佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳　2009『西原大塚遺跡Ⅰ～Ⅲ　西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第13集　埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合　埼玉県志木市遺跡調査会

佐藤俊彦　2001『木曽良・上野六丁目・西原・村国道下』岩槻市文化財調査報告書第22集　埼玉県岩槻市教育委員会

松本　完　1999「Ⅲ－１　集落の展開－武蔵野台地・東京低地－」『文化財の保護』第31号　東京都教育庁生涯学習部文化課

村田健二・劒持和夫・書上元博ほか　1998「木曽良遺跡の研究（１）－弥生時代の環濠集落を中心に－」『研究紀要』第14号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

和田晋治　1991「第４章　調査のまとめ　第２節　弥生時代の集落と環濠について」『南通遺跡第11地点発掘調査報告書』富士見市遺跡調査会調査報告第37集　富士見市遺跡調査会

［付　　編］

自 然 科 学 分 析

Ⅰ．西原大塚遺跡第231地点425号住居跡の赤砂利層の分析

藤根　久・森　将志（パレオ・ラボ）

1．はじめに

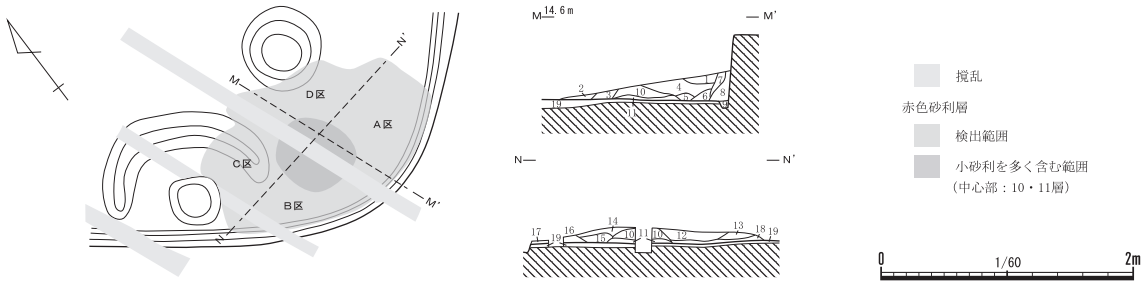
西原大塚遺跡第231地点の調査において、弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の425号住居跡の覆土中から赤砂利層が検出された。同様の赤砂利層は、これまでの発掘調査においても検出されており、蛍光X線分析（菱田　2009）や砂礫分析（藤根　2020）がなされてきた。今回も砂礫分析と土壌の蛍光X線分析を行い、赤砂利層の赤化要因の可能性について検討した。

2．試料と方法

分析試料は、425号住居跡の赤砂利層覆土７試料である（第13表・第26図）。なお、赤砂利層は、10層（分析No.4）と11層（分析No.5）が中心部であり、その他の層位は周辺部に相当する。

分析No.	遺構	時期	No.	試料	赤砂利の密度	堆積物の色調
1	425号住居跡	弥生時代後期末葉～古墳時代前期	A-A' 2層覆土	赤砂利層覆土	周辺部	にぶい黄褐色（10YR 4/3）、黄橙色（10YR 7/6）の粒子2mm含む
2			A-A' 6層覆土	赤砂利層覆土	周辺部	にぶい黄褐色（10YR 5/4）、明黄褐色（10YR 6/4）の粒子5mm含む
3			A-A' 9層覆土	赤砂利層覆土	周辺部	褐色（10YR 4/4）、明黄褐色（10YR 6/4）の塊25mm含む
4			A区 10層覆土	赤砂利層覆土	中心部	にぶい黄褐色（10YR 5/3）、明黄褐色（10YR 6/4）の粒子2mm含む
5			A区 11層覆土	赤砂利層覆土	中心部	にぶい黄褐色（10YR 5/3）、明黄褐色（10YR 6/4）の粒子3mm含む、礫目立つ
6			B-B' 13層覆土	赤砂利層覆土	周辺部	にぶい黄褐色（10YR 4/3）、明黄褐色（10YR 7/6）の粒子6mm含む
7			B-B' 16層覆土	赤砂利層覆土	周辺部	にぶい黄褐色（10YR 5/4）、明黄褐色（10YR 6/4）の粒子5mm含む

第13表　分析試料とその特徴



第26図　425号住居跡赤色砂利層サンプリング区分け（1／60）

各試料は、乾燥試料100g程度について、ホモジナイザーで分散した後、４φ（0.063mm）以上の篩を１φ間隔で重ねて湿式篩分けを行った。０φ（２mm）篩以上の残渣（砂礫）について、実体顕微鏡を用いて砂礫の岩石組成を調べた。

また、土壌の化学組成を調べるために蛍光X線分析を行った。試料は、ホモジナイザーで分散した後、懸濁部分を回収して、塩化ビニール製試料ホルダーに充填し、プレス機を用いて10tで加圧・成形

した。

測定は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計（エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製SEA1200VX）を使用した。装置の仕様は、Ｘ線管ターゲットはロジウム（Rh）、Ｘ線検出器はSDD検出器である。測定条件は、照射径８㎜、電圧50kVおよび15kV、試料室内雰囲気は真空、一次フィルタはマンガン（Mn）と鉄（Fe）の測定はPb使用し、その他の元素の測定は未使用で行った。定量計算は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP法）で定量分析を行った。

３．結果

分析試料は、にぶい黄褐色～褐色の礫混じりローム質土である。なお、いずれの試料も明黄褐色または黄橙色粒子を含んでいた（第13表）。

篩分けでは、いずれの試料も－１φ（２mm）以上の砕屑起源の礫が含まれていた。また、０φ（１mm）においても、ローム起源（火山灰）以外の砕屑物が特徴的に多く含まれていた。なお、－１φ以上の礫では、円礫が目立ち、亜角礫や亜円礫を伴う（第14表、図版10－１～７）。ただし、極粗粒砂（０φ）には亜角礫も含まれていた。なお、処理重量に対する砂礫の含有率（％）は、8.7％～28.7％であり、分析No.5が最も高く、分析No.3が最も低い（表２）。また、赤砂利層の中心部では、10層（分析No.4）が21.7％、11層（分析No.5）が28.7％で、砂礫の含有率は高く、極粗粒砂（０φ）および礫（－１φ以上）の粒数はいずれも多い。

極粗粒砂（０φ）および礫（－１φ以上）について、実体顕微鏡を用いて岩石種を調べた（第15表）。以下に、同定した岩石種の特徴を述べる。

石英・長石：透明または白色の結晶面をもつ単体鉱物である。多くは、極粗粒砂（０φ）で見られた。

片岩類：黒色と白色が縞状、または雲母類が層状に配列する粒子である。

ホルンフェルス：灰白色の斑状二次鉱物が見られる泥質粒子である。

砂岩：主に黒色、黒灰色を呈する砂粒質の集合物である。

泥・シルト岩：黒色、黒灰色の細粒質で、光沢がない粒子である。

硬質頁岩：黒灰色の光沢のある泥質岩である。

No.	1	2	3	4	5	6	7
赤砂利の密度	周辺部	周辺部	周辺部	中心部	中心部	周辺部	周辺部
-4 φ		7.87					
-3 φ		2.83			8.08	1.69	3.26
-2 φ	0.95	0.52	0.63	2.50	3.59	0.90	1.42
-1 φ	0.27	0.40	0.14	1.99	2.18	0.58	0.94
0 φ	0.21	0.26	0.09	1.25	1.08	0.25	0.71
1 φ	0.29	0.74	0.25	1.52	1.75	0.41	1.29
2 φ	1.36	2.56	1.22	4.04	4.38	1.92	3.10
3 φ	3.29	4.22	2.92	6.25	6.42	4.00	3.97
4 φ	3.86	4.64	3.54	4.30	4.11	3.65	3.08
4 φ以上の残渣（g）	10.23	24.04	8.79	21.85	31.59	13.40	17.77
4 φ以上の残渣（%）	10.2	22.6	8.7	21.7	28.7	13.3	17.5
処理重量(g)	100.19	106.31	101.11	100.84	109.99	100.54	101.61

（単位：g）

第14表　処理重量と各篩残渣

分析No.	赤砂利の密度	石英・長石類	変成岩類		堆積岩類					火山岩類					深成岩類	不明	合計
			片岩類	ホルンフェルス	砂岩	泥岩・シルト	硬質頁岩	チャート	凝灰岩	玄武岩	安山岩	デイサイト	流紋岩	軽石			
1	周辺部	4		1	9	3		18	6	10	2	12	1	5	3	4	78
		5.1	0.0	1.3	11.5	3.8	0.0	23.1	7.7	12.8	2.6	15.4	25.0	6.4	3.8	5.1	123.7
2	周辺部	13	3		26	2		28		6		5	7			8	98
		13.3	3.1	0.0	26.5	2.0	0.0	28.6	0.0	6.1	0.0	5.1	7.1	0.0	0.0	8.2	100.0
3	周辺部	2			16			2		2	4	1	1				28
		7.1	0.0	0.0	57.1	0.0	0.0	7.1	0.0	7.1	14.3	3.6	3.6	0.0	0.0	0.0	100.0
4	中心部	18	4		124	12		81	20	25	19	60	20		2	14	399
		4.5	1.0	0.0	31.1	3.0	0.0	20.3	5.0	6.3	4.8	15.0	5.0	0.0	0.5	3.5	100.0
5	中心部	29	2		93	18		54	20	21	30	87	27	2	1	12	396
		7.3	0.5	0.0	23.5	4.5	0.0	13.6	5.1	5.3	7.6	22.0	6.8	0.5	0.3	3.0	100.0
6	周辺部	4	1	1	14	2	3	38	3	1		5	1		1	22	96
		4.2	1.0	1.0	14.6	2.1	3.1	39.6	3.1	1.0	0.0	5.2	1.0	0.0	1.0	22.9	100.0
7	周辺部	15			33	17	1	16	19	26	10	58	13		2	45	255
		5.9	0.0	0.0	12.9	6.7	0.4	6.3	7.5	10.2	3.9	22.7	5.1	0.0	0.8	17.6	100.0
全体		85	10	2	315	54	4	237	68	91	65	228	70	7	9	105	1350
		6.3	0.7	0.1	23.3	4.0	0.3	17.6	5.0	6.7	4.8	16.9	5.2	0.5	0.7	7.8	100.0

第15表　0φ（1 mm）篩以上の岩石組成

チャート：黒灰色、赤褐色、白色、オリーブ色などを呈し、光沢がある。

凝灰岩：全体的に白色を呈し、砂質であるが、基質は白色物からなる。

玄武岩：主に黒色～黒灰色の発泡した粒子が多い（図版10－8）。

安山岩：黒灰色、暗灰色の斑晶質の粒子である。

デイサイト：灰色、淡褐色の斑晶質で、発泡する粒子もある。風化した黒色スコリアを含む。

流紋岩：白色・灰白色で光沢があり、流理または斑晶質の粒子である。

軽石：白色の発泡したガラス質粒子である（図版10－9）。

深成岩：白色を呈し、石英や長石が複合し、黒色鉱物（雲母類または輝石類など）を伴う。

その他：ローム質塊や輝石などの鉱物類である。

全体的に砂岩やチャートなどの堆積岩類が多く、デイサイトなどの火山岩類が目立つ。

土壌の蛍光X線分析では、含有量が多い順に、酸化ケイ素（SiO_2）が24.41～43.24%、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が25.31～41.00%、酸化鉄（Fe_2O_3）が25.15～32.32%、酸化マグネシウム（MgO）

分析No.	赤砂利の密度	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2	BaO	合計
1	周辺部	0.00	0.48	25.60	43.24	0.39	0.67	0.84	1.27	1.59	0.52	25.29	0.01	0.02	0.01	0.04	0.02	99.99
2	周辺部	0.00	0.78	25.31	43.10	0.48	0.43	0.96	1.20	1.72	0.79	25.15	0.01	0.02	0.01	0.04	0.02	100.02
3	周辺部	0.00	1.56	26.92	41.13	0.36	0.54	0.86	1.18	1.57	0.54	25.22	0.01	0.02	0.01	0.04	0.02	99.98
4	中心部	0.00	0.66	36.73	25.51	0.71	0.64	1.06	1.95	1.21	0.94	30.44	0.01	0.03	0.02	0.06	0.03	100.00
5	中心部	0.00	1.10	29.10	30.31	0.60	0.56	1.13	2.02	1.76	0.94	32.32	0.01	0.04	0.02	0.06	0.03	100.00
6	周辺部	0.00	0.51	41.00	24.41	0.40	0.71	0.97	1.19	1.92	0.72	28.04	0.01	0.02	0.01	0.05	0.02	99.98
7	周辺部	0.00	0.70	39.04	26.90	0.65	0.43	0.97	1.58	1.52	0.73	27.37	0.01	0.03	0.01	0.05	0.02	100.01
最小値		0.00	0.48	25.31	24.41	0.36	0.43	0.84	1.18	1.21	0.52	25.15	0.01	0.02	0.01	0.04	0.02	
最大値		0.00	1.56	41.00	43.24	0.71	0.71	1.13	2.02	1.92	0.94	32.32	0.01	0.04	0.02	0.06	0.03	

（単位：重量%）

第16表　土壌プレス試料の化学組成

が0.48～1.56%、酸化チタン（TiO_2）が1.21～1.92%、酸化カルシウム（CaO）が1.18～2.02%、酸化カリウム（K_2O）が0.84～1.13%、酸化リン（P_2O_5）が0.36～0.71%、酸化イオウ（SO_3）が0.43～0.71%などであった（第16表）。なお、赤砂利層の中心部の鉄含有量は、10層（分析No.4）が30.44%、11層（分析No.5）が32.32%であり、周辺部に対していずれも高い。なお、酸化ナトリウム（Na_2O）はいずれの試料も0.00%であったが、水を加えて懸濁部分を回収したために、水溶液中に流出したと考えられる。

4．考察

弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の425号住居跡の覆土中の赤砂利層について、湿式篩分けを行い、砂礫の岩石種および土壌の蛍光Ｘ線分析を行った。

その結果、全体的に砂岩やチャートなどの堆積岩類が多く、玄武岩やデイサイトなどの火山岩類が目立つ組成であった。これは、第216地点の弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の601号住居跡の赤砂利層と概ね類似した結果である。玄武岩や安山岩などは、発泡質が目立つため、富士火山噴出物のスコリアと考えられる。なお、分析No.1には白色軽石が含まれていた。－１φ以上の礫では、亜角礫や亜円礫を伴うものの、円礫が目立ち、熱を受けた際にできる角礫状の破砕礫は顕著ではなかった。

土壌の蛍光Ｘ線分析では、酸化鉄（Fe_2O_3）が25.15～32.32%と高い値を示し、赤砂利層の中心部の10層（分析No.4）および11層（分析No.5）において特に高い値を示した。なお、10層（分析No.4）および11層（分析No.5）においては砂礫含有率も高かった。

西原大塚遺跡第216地点の弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭の601号住居跡の赤砂利層では、河川成の礫に特有の円礫状の礫が大半を占めており、受熱に際して形成される破片状を呈する破砕物は見られなかった。よって、礫表面にみられる赤化部は、給源礫層中の鉄分や風化に伴う鉄分の赤色化である可能性が高いとされた（藤根　2020）。

なお、発掘調査では炭あるいは灰の痕跡は確認できず、明らかな加熱の痕跡は見られない。

今回の425号住居跡の赤砂利層も同様の結果と考えられ、給源礫層中の地下水の鉄分が沈着して赤化した可能性が高い。赤砂利は透水性の悪いローム層上に堆積するが、ローム層の上面を地下水が通ることで、砂礫を多く含む赤砂利の中心部に鉄分が多く沈着した状況が考えられる。

【引用文献】

藤根　久　2020「Ⅳ．601号住居跡の赤砂利層覆土の砂礫分析」『西原大塚遺跡第216地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第76集　埼玉県志木市教育委員会

菱田　量　2009「（３）西原大塚遺跡出土の暗赤褐色堆積物について」『西原大塚遺跡Ⅲ　西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第13集　埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合　埼玉県志木市遺跡調査会.

図　　版

1. 調査前風景

2. 1区表土剥ぎ風景

3. 2区表土剥ぎ風景

4. 1区遺構確認状況

5. 2区遺構確認状況

6. 838号土坑

7. 907号土坑

8. 908号土坑

図版2

1. 425号住居跡遺物出土状態

2. 425号住居跡遺物出土状態

3. 425号住居跡Ｐ１

4. 425号住居跡Ｐ２

5. 425号住居跡赤色砂利層検出状況

6. 425号住居跡赤色砂利層断面（M－M'）

7. 425号住居跡赤色砂利層（中心部）検出

8. 425号住居跡貯蔵穴

1. 425号住居跡南コーナー付近

2. 425号住居跡炉跡

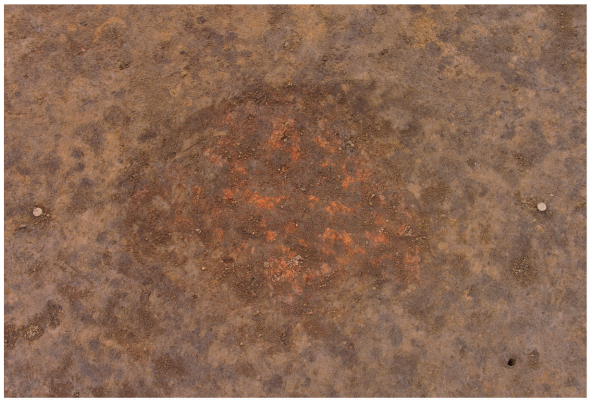
3. 425号住居跡

4. 425号住居跡

5. 635号住居跡

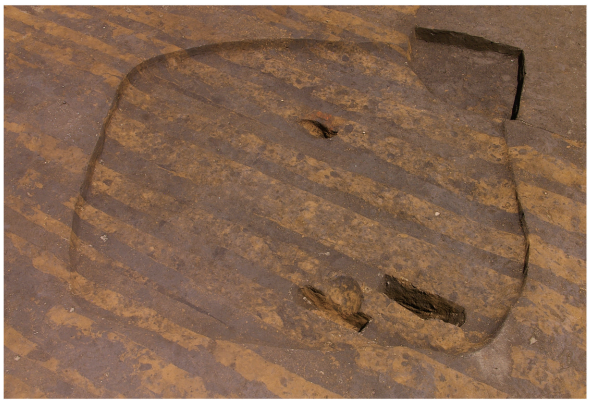
6. 635号住居跡西コーナー

7. 635号住居跡貯蔵穴



8. 635号住居跡炉跡

図版4



1. 636号住居跡

2. 636号住居跡

3. 636号住居跡貯蔵穴

4. 636号住居跡炉跡

5. 637号住居跡

6. 637号住居跡

7. 44号溝跡遺物出土状態

8. 44号溝跡遺物出土状態

1. 44号溝跡遺物出土状態

2. 44号溝跡遺物出土状態

3. 44号溝跡土層断面（H－H’）

4. 44号溝跡被熱硬化状況

5. 44号溝跡（北から）

6. 44号溝跡（南から）

7. 28号住居跡カマド

8. 28号住居跡

1. 5号柵列状遺構(西から)

2. 5号柵列状遺構(東から)

3. 6号柵列状遺構(北から)

4. 6号柵列状遺構(東から)

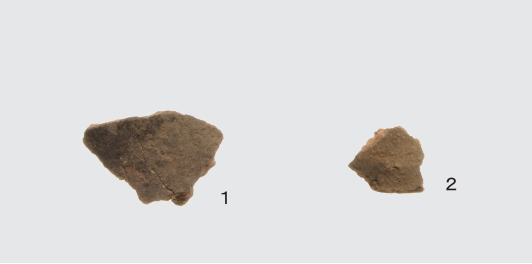
5. 6号柵列状遺構(西から)

6. 1区発掘風景

7. 2区発掘風景

1. 907号土坑出土遺物

2. 425号住居跡出土遺物

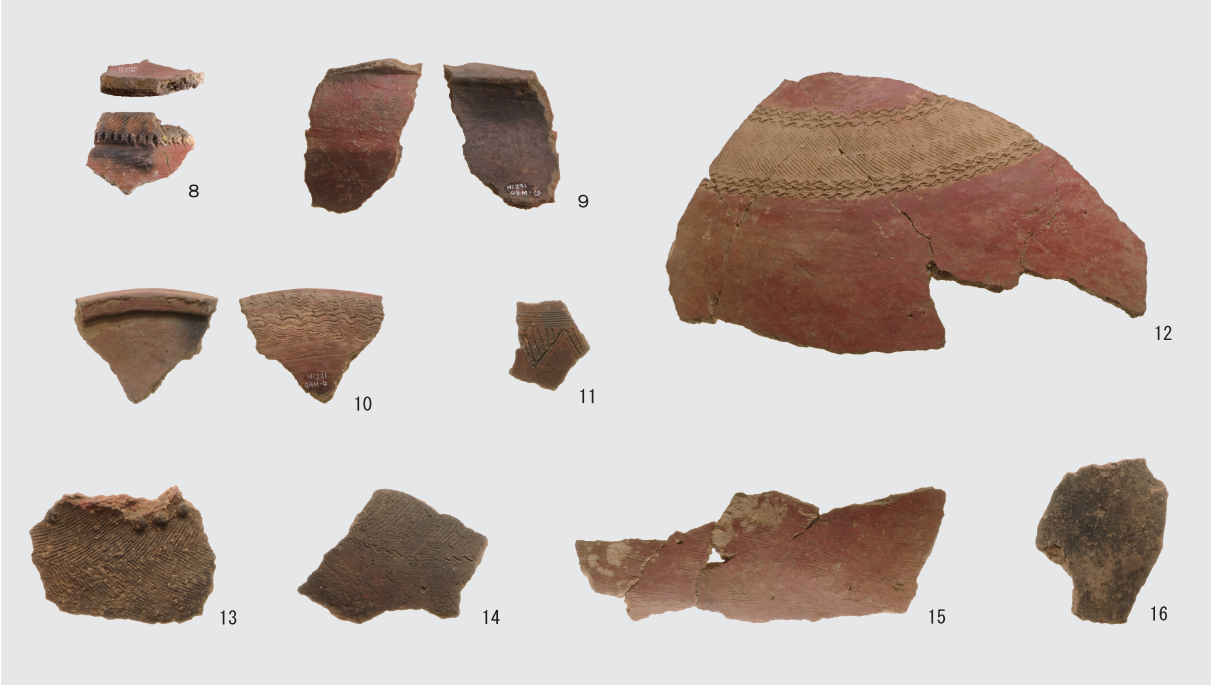


1. 635号住居跡出土遺物

2. 636号住居跡出土遺物

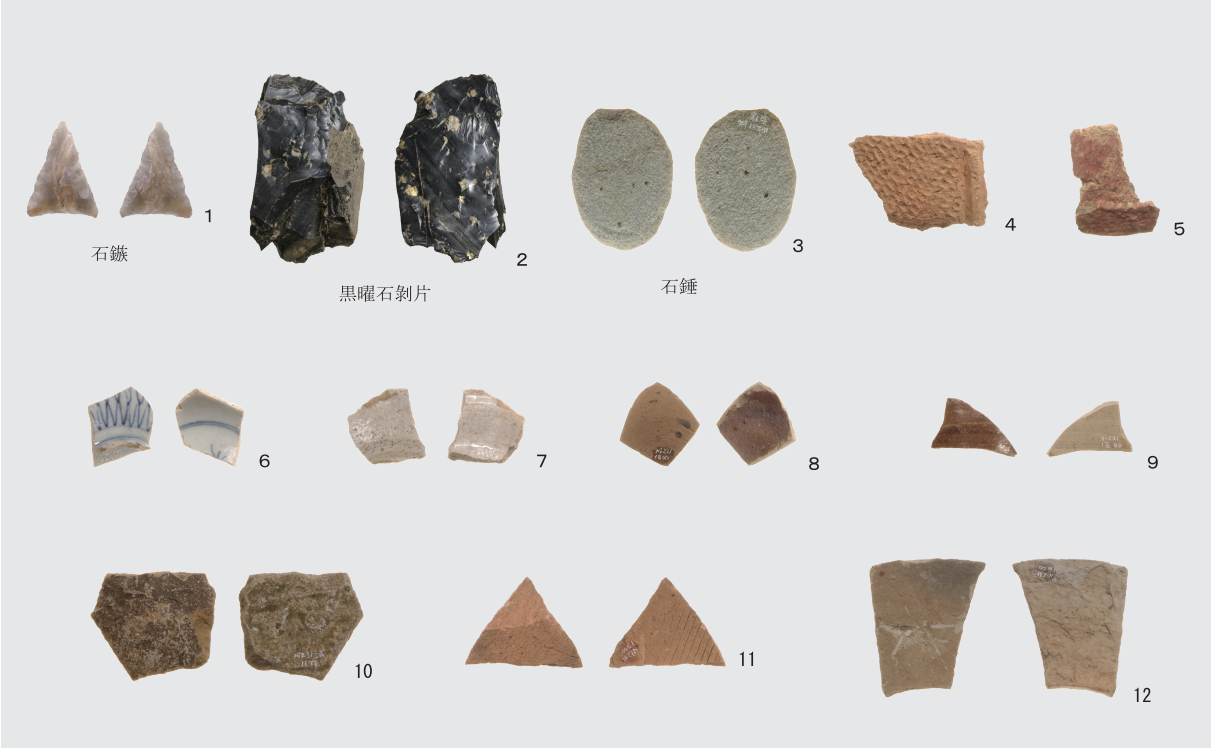
3. 637号住居跡出土遺物

4. 44号溝跡出土遺物 1



1. 44号溝跡出土遺物 2

2. 6号柵列状遺構出土遺物



3. 遺構外出土遺物

図版10

1. 分析 No. 1　2. 分析 No. 2　3. 分析 No3　4. 分析 No. 4　5. 分析 No. 5
6. 分析 No. 6　7. 分析 No. 7　8. 玄武岩（分析 No. 1）　9. 軽石（分析 No. 1）

赤砂利層中の砂（0φ篩残渣）の実体顕微鏡写真

報　告　書　抄　録

ふりがな	にしはらおおつかいせきだい231ちてん　まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	西原大塚遺跡第231地点　埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	志木市の文化財
シリーズ番号	第80集
著者氏名	大久保　聡　尾形則敏
編集機関	埼玉県志木市教育委員会
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号　TEL 048（473）1111
発行年月日	令和3（2021）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積（㎡） （全体面積）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西原大塚遺跡 （にしはらおおつかいせき） （第231地点）	志木市幸町 （しきし さいわいちょう） 2丁目6149・6150	11228	09-007	35° 49′ 32″	139° 33′ 59″	20200421 ～ 20200530	564.22 （883.00）	分譲住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西原大塚遺跡 （第231地点）	集落跡	縄文時代 弥生時代後期～古墳時代前期 古墳時代後期～平安時代 中世	土坑　3基 ピット　1本 住居跡　4軒 溝跡　1本 住居跡　1軒 柵列状遺構　2条 （ピット）　29本	土器 なし 土器・石器 土器 なし 陶器 陶器	弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の44号溝跡（44Ｍ）は、構造及び過去の周辺の調査成果から環濠と考えられる。 古墳時代後期～平安時代の住居跡と扱った28号住居跡（28Ｈ）は、調査済遺構であり、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（旧178Ｙ）と報告されたものであったが、今回、北壁にカマドの痕跡が確認できたことから、変更し改めることとした。

要　約

西原大塚遺跡は、縄文時代中期の環状集落や弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡を主体とする遺跡である。今回は第231地点の調査成果を収録している。

本地点では、縄文時代の土坑3基・ピット1本、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡4軒・溝跡1本、中世の柵列状遺構2条・ピット29本などが検出された。特に弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の44号溝跡（44Ｍ）については、構造及び周辺の調査成果により、環濠の一部と考えられる。中世では、東西方向に溝状に延びる2条の畝が確認できたが、内部及び周囲にピットが伴うものと判断し、これらを中世の柵列状遺構と捉えることとした。

志木市の文化財　第80集

西原大塚遺跡 第231地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発　　行　　埼玉県志木市教育委員会
　　埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号
発 行 日　　令和3（2021）年３月31日
印　　刷　　株式会社 白 峰 社